

月すみ風やむ夜半の空は
 何等の微妙の樂のしらべぞ
 天の萬軍をかきわけて
 ひとり無象の空にとぶ
 『セラフ』伴なく淋しくて
 人世の痛み暗なやみ
 身にとこしへに纏へども
 天の妙音耳にあり
 思は遠し高山の曲
 神は通ふ天上の韻
 大絃小絃大鼓小鼓
 花咲き花散り
 水わき水おち
 千軍忽ち大野にみちて
 萬馬は嘶く霞の夕
 あゝ今勇士は楯にのりて
 歸るよ故郷のはまれの門に

あゝ今美人は嬌羞たへず
 うつむく華燭の光の夕
 あゝ今冥府の神祕ひらけて
 『サタン』は天使と手を握り
 あゝ今天風我身をのせて
 彩虹彩雲ひらめくところ
 玉樓金殿虚空にそびゆ
 藝術永く榮ゆれど
 紅塵の中いくたびか
 見る盛衰のことわりぞ
 時は移り世はすすぶ
 跡を今見るオーストリア
 あゝ美人老いて秋に泣き
 蛺蝶むなしく春を思うて
 なごりの花の露によるごと
 神聖羅馬帝國のあと

「チユートン」の盟主歐の中堅
 中原の鹿他の手におちて
 「ハプスブルク」の光榮うすき
 なんぢを憐むオーストリア。

カーレンベルグの頂に

我今ひとり夕陽の天、

萬家の大都遠く下に

ドナウの大河涵し行く

岸に連る幾丘陵、

其丘のあなた水のあなた

東亞の萬軍亂れ入りて

野は青草のあとを絶ち、

「モンゴル」「タータル」「オットマン」

火山碎けて鐵石の

溶液嶺より降る如く、

霹靂電火震ひ落ちて

冥府の暗を照す如く、

こゝに狂ひし東亞の軍、

再びひがし「聖壇の地」

鮮血注ぎて救ふべく

百萬の十字軍幾度過ぎし。

それよりこのかた五百年

「タータル」敗れて東に逃れ

弦月の旗この嶺に

たちし名残はたゞ「青草」。

波紅に淀みしや

其水沿うて幾百里、

わが途再び大江の岸、

緑野ひらいて牛羊眠り

丘陵點じて白雲うかぶ

こゝに「アルーヤ」以外の精華

據る美はしき山河の固

岸につらなる樓閣巨殿
尖頂高く空をつきて
夕日をかへす衆議の院府
城壁むかしの跡とめて
高しかなたに列王の宮。

盛なるかなウーガール、
有史このかた東より
はるかにこゝに移りきて
こゝに嚴冬の霜にたへ、
あらしの音に紛られて
暗濤ほのかに鳴るごとく、
夜半の鐘のたゞなかに
朽ちし古墳をのがれ來て
怨の幽鬼泣く如き
國の調に跡のこす
なやみの歴史數百年

今時いたり春回り
花咲き鳥鳴く希望の姿
紅白緑の大旗は
飛ばん再び自由の風に。

あゝウーガール、
先きに獨立の旗さかれ
干戈悉く壊られし
恨をのみて五十年、
時に暴主に威を添へて
義軍を討ちし北の邦、
今も呑嚙の怨あかず
封豕長蛇東にむかひ
愛親覺羅の祖先の墓を
發きて遂に南に下る。

東海扶桑の民の怒

發して火となり鐵となり
其馬首一度むくところ
鴨綠の水南山の嶮
皆ひれふして聲あらず。

あゝウングートル、

「アルトア」以外の人種の精華
ひとりなんぢとわれとあり。
時は轉じ世は移り
未來は笑ひて我待つを、
見よ大江の水、
示すは活動無窮の姿、
流れて流れて流れてやまず、
流れてこれより南に遠く
バルカンの荒雲日暮るゝほとり
アドリヤノーブル弦月の天
コンスタンチノーブル薄暮の空

影を姿をひたし流して
はるかに黒海の水に入るべく。

(明治三十七年夏)

サレフ峰頭にて

(瑞士ジエネヴァ郊外の山)

緑は暗し千仞の崖
下なる大野は遠く烟り、
右は白帆漣漪を引きて
白鷗また飛ぶ藍光の水、
名邑並びて美を競ふ
長汀廻りて六十里、
そこにルソーの聲あけ
そこにヴォルテアを繙しほり
そこにギボンの大史を編み

そこにバイロン囚者を詠みし
ジエネヴァの鏡湖レーマンの水。

けにや千載功業のあと

鴻の大空に去る如く

文名はまた不朽に鐫らず、

たゞ山川のおほいなる

巧のあとの新たなる

高きへのぼり遠きを望み

逝けるを傷み生けるを忍ぶ

飄遊今われ二春秋、

閑雲一片心なく

長空かくる跡とや見えむ。

さりや暮行く夕の雲

人界の子の悟らざる

惱は中に宿らずや、

天地の情をその胸に

山河の影をその袖に

包みて過ぎ去る何のほとり

行方か一黛あなたの青螺

夢むる如き暮山のあなた

かれ佛蘭西の夕空か。

五天の東八千里

ヒマラヤ暮雪の嶺の下

聖者の遺文求め来て

客衣ふたゝびセイヌの春の

水に灑ぎし好學士

魂は異郷に迷はずや。

聞くまた再び故郷のたより

清きを名に負ふ緇衣の賢

澤畔の行吟それならなくに
仰ぎし真如の月黒く
隠ると聞きぬ西の空。

更に骨肉恩愛の彼

不敏の兄に仕へ來て

盡しし思報はれず

故山の花を摘み送る

にほひ紅色深き

誠は遂に人の世に

また見るべくもあらずとや。

誰が涙痕に濕へる

文や蒼烟夕の空に

何等の星の涙添へて

こゝに飄浪の客衣の袖

搾れとせむる無限の恨。

紅雲夕に暮るゝ影に
樂しかりしの聲もあらせず、
同胞先に生れ來て

愛の光を身にうけし

報は今はいたづらに

たゞ君の名を呼ばんのみ、

湖山の眺め勝地の遊

思しばらくはらすべく

のほれば空翠袖を拂ふて

幽怨しづかに潮の如く

遠く東海の空より到る。

アルペンの嶺の草花

紅紫千々に匂ふ。

高嶺の夏のなかくに

故山の秋に似たるかな。

嗚呼其秋の夕ぐれや

鳴呼其秋の夕ぐれや

むかしは共に花つみて
 淋しき孤館の夜の館
 われ口ずさみ君書きぬ。
 浮世の秋を知らざれば
 籠狭けれど鳥啼きき。
 鳥鳴き花咲き月にほふ
 春秋いくたび廻り來て
 われや客衣の袖寒く
 君や九泉魂いづこ。
 逝けりと聞くは夢ならず、
 生けりと猶見る夜々の夢
 悽愴のあした風吹きて
 うつゝにかへす無情の叫び、
 披けし腕は空を抱きて
 魂を呼べども雲白し。

萬里の速きアルペンの上
 花つみとりし昔をしのび
 再びあとを紅に
 白に紫つみとれど
 幽明一たび離れては
 いづくの風に傳ふべき、
 あゝ風吹いて雲ひがし
 光を孕み虹を吐き
 東海はるか駆け行かば
 わがため故山の墓の上
 花に夕の露そよげ。
 招ける魂は遠く去りて
 野花青草の嶺のうへ
 行みのこる影ひとつ
 見る今サボイの山のうへ
 日はしづかにくだり行き

烟はかろく森こめて
 下にはるかにローンの流れ、
 東千山萬嶽のうへ
 雲は漸く眠るべく
 搖曳の影暗きほとり
 一峰抜きて天に入る
 白雪嶺の名も高く
 上にははや照る一輪の月、
 萬籟しづかにおさまりて
 獨り飛蟲の羽うつ音。
 牛羊牧より歸る鈴のね、
 遠きに聞ゆる異禽の叫、
 あゝ今天地は至上の愛か。
 微妙を極むる平和の姿――
 詛ふにあまりにやさしの姿――
 あゝわが弟遂に逝けりや、

(一) 藤井宣正氏

(二) 清澤滿之氏

(三) 土井新二氏

ライプチヒ郊外ナポレオンの記念碑

烟塵天を暗うして
 萬軍ひとしく大地を蹴たて、
 砲彈散彈虚空に吠えて
 草木悉く兵なりし
 むかしの姿今いづこ。
 人は空しく過ぎされど
 自然の大化過たず、
 春は大荒に歸り來て
 見渡す廣き一望の

野は今漸く夕ゆふべの色に
遙かに一列みどり線のボブラ
風に靡きていづれに向ふ。

柵に攀ぢ樹に登り
戯れし無心の子らの群
去りてわが影たゞ残る
田に野に畑に幾度か
鋤き返されて留るは
丸か劔か血を染めて
こゝ肥すべくさらされし
貌ひま貅まの数は二十萬。

見よ今震ふ樹の下かけ
鐵柵愁しづに冷かに
下の青草の聲なきに
共に懐古の歌を呼ぶ。

曠世の偉人こゝに立ち
運命の潮返すべく
胸に湛へし風雲の機
あはれ堅陣遂に潰えて
なだれを打ちて崩れ來し
中にたじろく鷲の犬旗
翼は折れぬ旗裂けぬ。

あゝ明日あす南三百里
秋のエルバの籠の鳥
あゝ明日ふたゝび百日の
光榮最後の金の冠
あゝ明日是れより西百里
ウイターローの暮の雲
あゝ明日烟波の沖萬里
セントヘレナの墓一つ。

成敗ものゝ數ならず、
 横目縦鼻世に湧きて、
 人と呼び來し數千劫
 生ける屍走る肉
 みな蠢々の塊なるを、
 ひとり君出でおほいなる
 力あるものこゝに見ぬ。

答むる勿れ天の命、
 詩人の感を深うして
 百世君を歌ふべく
 最期は悲慘の島の上
 島を洗ふて流れ去る
 波に沈める夕陽の
 光は水に亡びんや。

* * * * *

パイロン

(希臘の獨立軍を救ふべく伊太利
 を去るパイロンの懐をよめる。)

シムーンの烈風吹き絶えし
 砂漠を照す眞晝の光
 頭上に燃え立つ怒の焔。
 渾身さながら瀑なす汗に
 重き荷苦む可憐の旅客、
 足なへ手なへて倒るとき、
 はからず認むる遠のみどり、
 あへぎたどれば波とそよぐ
 椰子のしけみの十丈高き、
 下に湧きづる玉なす泉
 滾々みなぎる生命の水、
 せわしく両手に掬む如く――

青春きのふのあけぼのは
堪へがたかりし知識の渴
學び悟れる今何ぞや。

弦月斜に露寒き
墓門の夜半に泣く如く
青燐の焰のさめし時
幽冥の客に問ひし幾たび
劫灰重る宇宙の死滅
殘骸骨は丘と積みて
青山とこしへに春ならず
いづれか秋に逢はざらむ
花のなごりを尋ねれば
濃霧の海にわけ入りて
あらしにかこつ枯落葉。

學び悟れる今なぞや。

陰雲雨を含みさりて
頭上を翔くる魔の姿
追へば人なき夕の岸
神祕下界に探るべく
彗星の魂降りきて
九仞の淵わけし跡
今も怒濤の山さけて
あざむか脆き人の世を。

太虚を廻る千萬の天球

(内に無数の靈宿る)

勇みて光の途行くいづれ
喘ぎて亡びに歸るはいづれ
いづれか驚き逃げはしる
いづれか喜び躍り行く

宇宙の合調ききはたそや、
 それはた更におほいなる
 非一合調の一ふしか。
 彩虹一たび橋絶えて
 天上ながく音づれをやめ、
 夕ぐれ朱の雲の粧、
 たゞ人界のあこがれの
 惱を無窮に誘ふよすが、
 悟の異名薄命の
 わが手空しく虚を握み
 わが脚土を離れ得ず、
 知識の渴をとどむべき
 甘露夜光の盃に
 觸れしは夢かめさむれば
 またとこしへに乾く唇。

死と疑の子となりて
 惑の惱むしばめる
 心さながら蜂の巢か、
 救をこゝと誤りし
 戀はたにがき底の澱
 見よ明眸の閃に
 燃ゆるは情焰何の恨、
 冥府の底の暗深く
 光を内に吸ひとりて
 うづく魔軍の影たゞ示す
 硫黄の池の波の色、
 金髪亂れてかざしの薔薇
 落ちて碎けてちりあぐた
 碎くるいまはの花の吐息
 樂土の榮のとこしへを
 ねたむ思に亡びぬと。

迷の暗ははや足りぬ、
山河姿を整へて
天地清淨の身に返り
自然の讚美ひよく時、
煩悶理性の争に
人は運命のもてあそび、
新の救いづこぞや。

千尋まくらき波の下
蒼海さながら陰府の姿、
潜ればあらしに燕の如く
尾鰭を拂ふ百千の魚、
時に鯨鯢潮を亂し、
海草今また刺ある四肢に
纏はん苦凌ぎ行き
底なき眞珠を求むるごとく、
かくまた人生懷疑の海に

靈魂くゞりて光を探る、
拾はむ其玉「行爲」と呼ぶ。

紅焰黒煙空を突くと
見しもわれから燃えたちし
名残火はなほ亡びじを
残れる焰さは持ち行かむ、
縁を染むる春草の
望かへりて死せる灰
再び熱き自由の郷に。

颯風の翼しぼるはたそや、
瀑布の流とむるはたそや、
磁石の北向く拒むはたそや、
自由の大靈血ある胸に
焰を燃すを消さんはたそや。

ユーラの連山なだれおとして
 アルペン首峰の答ふる如く、
 曉銀河の水掬みて
 粧ふ女神(月と呼ぶ)
 胸はやさしく脈うちて
 大地の靈をしたふ時
 大わだつみの波ゆらぎ
 あらしを笑ふ鋼鐵の
 十萬の船率る來て
 沖より潮の寄する如く
 聞きしやわがよぶ自由の歌に
 全歐ことごとくどよみしを。
 盛衰の運命神のみ避けむ。
 葡萄の房の紫の
 空やセイヌの春の水
 花を流して行く水の

はては大海あけの汐
 漲る音と凱歌は
 自由の讚美黄金の
 世を今と見しまぼろしや。
 詩人夜半の露にさめ
 古壘の月に嘯きて
 玉樓の昔夜の宴
 笑を含みて君王の
 おもて光りしいにしへを
 榮華の夢を呼ぶ如く
 巴里の花のうつろひを
 あゝ其自由の喪失を
 我歌はんに何の琴。
 春また遠しオリンピヤ
 智慧は綠眸

戀は紅顔、
 たくみと榮とよろこびの
 春いや遠し二千年、
 アクロポリスに月清く
 レスボスさうびにはへども、
 秋ならざるに愁の狭霧、
 神殿空しく破壁をとめて
 サイモピリイの山ひとり泣く。

裂かれてしかも飄へり
 あらしに叫ぶ自由の旗、
 山河の姿移らざる
 故郷に再び飛ぶは何時、
 成らんか、サラミス波名をよばむ
 否か、さはモレア野を血に染めん、
 光榮二の途に俱、
 さらば鼓動の胸の血を

湧かしてたてたてあゝわが友、
 風清うして空高き
 秋におごれる若鷹の
 翼とよめん境なく
 翔けん雲海限りあらじを、
 行雲もろともあらしに呼んで
 いざや天涯遠くたゝむ、
 『ルックス、エクス、オーリエンテ』
 あゝ見よ東方光あなたに。

歐洲大陸回顧の歌

四たび今見る地中海
 春秋三たび過ぎ去りし
 むかしは曙の波の色
 紅雲紫雲に飛びちがふ

白鷗の胸に先づ照りし
旭日の下に躍りしよ。

秋なほ遠き暮の空

丘また丘を見おろして

焔の海を身に包む

エトナを高く雲のうへ

海路遙かに仰ぎ見し

それも昔か波めぐる、

あゝ波めぐる、水流る、

時亦過ぎていやはての

別をなんぢの空に水に

われ今告げむ歐羅巴。

アルビヨンの岸去りてより

ビスケイの波あらからず、

千里遙かに波送る

ジブラルタの水過ぎて

昨日は樂園の名に高き

藍光いみじきネーブルス、

十月の秋暖に

白雲空に高うして

明光笑ふポゾリの岸

白聖點するバイアエの村、

歴史を遠くたどり行けば

北七丘の都より

千乗萬騎率る來て

狂ひ戯れし帝王の

名は戦慄の血の叫び、

玉樓こゝに湧き立ちて

脂粉溶かし湯沐の

香はあたゝかき春がすみ

羅馬むかしの光榮の

夢は再び歸らねど

詩情は酌みて盡きせざる
 南歐の岸、藍の水、
 海燕時に影を照して、
 孤舟に歌ふ少女の聲に、
 風もしづまる一灣の夕、
 次第に波の暮れかゝる
 沖にはるかにイスキアの島、
 詩人の戀のおもかけを
 残す姿のいともいみじく、
 天地萬象こゝに靜に
 夢は星光にたどりよちて
 高く雲漢の上へのほりし
 それはた過ぎしたゞの一日か、
 月か年か千歳も
 永遠の前にたゞ一瞬
 存在ながく神祕に掩はれ
 運命つねに不測に終る

(悠久の靈の一呼吸)
 微なる人間猶生ありて
 われ今遠く東に歸る
 (一)ネロ帝こゝに豪者を極めたり
 (二)佛國の大詩人ラマ・マチーン
 見よ日は亭午に近けり
 風やよはけしく波おどる、
 雲かすかなる沖の火山
 ストロシボリの麓にして
 螻蟻の春にいそしむ如く
 洪爐の淵に片時の生を
 營む一團の人の郷、
 右に眺めて過ぎさりて
 海峡メシナの水に今
 照す東海の孤客の影、
 影は流れて水と共に

なんぢに別る歐羅巴。
 むかし化粧の白牛の
 脊に戀つみて花のせて
 あけぼの清き朝夕の
 海を渡りし美人の名
 その名を借れる大陸の
 なんぢに別る歐羅巴。
 雲心無うして風に任せ
 蘋藻情有りて流に靡く
 あとさながらの旅の跡
 アルベンの雪、ラインの水
 セイヌのあしたドナウの夕
 めぐりし跡は追想の
 思の泉湧くがまゝ
 夜半にたどる人の子が

次第に後に遠ざかる
 街燈の光忍ぶ如く、
 さはいへ故山を思ひては
 飛鳥の翼たゆくして
 暮山の宿に歸る如く、
 流水みどりを湛え來て
 大なる壑に入る如く
 後を顧み前を見て
 われ今別る歐羅巴。

(一) ゲユピタアの神白牛に化けて美人ユーローバを
 誘へりとの神話

こゝに春秋三たびの宿
 越鳥南枝に巢くふの聲
 夢魂しばし東に馳せて
 思は悲む夜鶴の吟
 風に待ちわぶ秋鴻のたより、

喜つねに稀にして
 憂は多き人の世に、
 一たび空は曇り來て
 セイヌの岸に友の訃音
 二たびあらし狂ひきて
 アルペンの下清湖のうへ
 至愛の骨肉逝けるおとづれ、
 三春の夕風無くて
 しづかに花の眠る如く、
 九秋の暮洞庭の
 水波たちて楊柳の
 枯葉次第に散る如く、
 その他に共に幽冥の
 郷に逝けるや幾何ぞ。
 天地莊嚴の美は永く
 わが人界の愁に對し、

長空染めなす彩虹は
 閻浮の友の涙に照るか。

やんぬる哉時うつり
 メシナは後に遠ざかり、
 橘柚檸檬の森しけき
 風かんばしきカラブリヤ、
 藍をつねなる空ながら
 今灰色の雲かゝる
 南伊太利陸の端、
 その一瞥をいやはてに
 爾に別る歐羅巴。

前を望めば渺々の水
 清濁悉く合せ呑み
 凝滞つゆ無き偉人の如く、
 雲をひたし風を孕み

光を吐き暗を呑み
 天の圓蓋を胸にうつす
 大海原の水また水
 はるかに萬里の潮を呼びて
 わが東海の空に連る。

潮流互に相混じ
 風雲等しく流れ合ひ
 文運時運西と東と
 ひとつにまじる大化の妙
 昔東方の光受けて
 イオニヤの海あけわたり
 チベルの岸に花咲きし
 このかたたどる一道の
 光はこゝに二千年
 見よ今東海扶桑の邦
 その文華を新たに亞細亞に

傳へて世界の姿を更へむ。

大陸亞細亞歐羅巴
 空を仰けば一面の蒼穹
 波また續きて隔あらねど
 差別平等互に相より
 人爲天然こもくたよりて
 名に心あり力あり
 理想の夢を笑へども
 現實の世に悲める
 今日より後のおほいなる
 高き望に備ふ途
 錦繡の裏文無くして
 光明の蔭暗深き
 基督世紀第二十
 その文明の功と過と
 君たゞ永遠の靈に問へ。

嗚呼歐羅巴、なんぢに別る、
 今や故山の戰雲暗く
 海荒れ波荒れ空荒れて
 炎熱身を焚く遼東の野
 寒風膚裂く朔北の空
 集る王師五十萬、
 蛟龍の吟劍鳴りて
 雲霓の文氣は沖で
 身命軽く義重く
 かざす旭日の旗の前
 豺狼虎豹ことごとく
 次第に北に驅られ去る、
 膺懲の功全くて
 暴露を東亞の天の外に
 拂ひて禍根を絶ち去らむ
 望いかでか空ならむ。

天を祐け命を受け
 民を導き俗を化し、
 爾の文華を歐羅巴、
 傳へて亞細亞に光布き
 新たに天地を春にして
 世界の姿換ふるべく
 皇天こゝに懸くる命
 亭くるや嗚呼民何の榮ぞ。

聯想次第に移り行く
 夕波あれ風あれ
 海上泛ぶ雲千片
 渦巻き立つを貫きて、
 巨人の射放つ矢の如く
 偉大の靈より群りて
 湧きくる思想の火の如く、
 燦爛散り射る夕の光

おほいなる日は今沈む。
 日の入る處今三とせ、
 日出づる東海の波萬里
 はてより來りて今歸る
 孤客なんちに慇懃の
 別れを惜む歐羅巴。
 昇る日誠におほいなり
 落つる日ひとしくおほいなり、
 昇るも入るも移り行く
 無常無窮の世の姿
 觀じて民よ嗚呼思へ、
 おのれの小を思ふ時
 人ははじめて大となり
 義により命を悟る時
 國にはじめて光あり。

別れむさらば歐羅巴、
 烟波の外に大陸の
 端今遠く消果つる
 海、空、影、音、たゞひとつ、
 今咆え叫ぶ夜の風
 今山と立つ暗き波、
 千萬の響き
 千萬のしづまり、
 生死幽明逢ふ處
 大荒蒼穹寄る處
 浮漚の姿一微塵
 われ今歸る遠く東に。

(明治三十七年十月)

*
*
*
*
*

序

華嚴楞嚴に詩無しとすれば詩は何處にあらう、ヨブ、イザヤ、ヨハネに歌なしとすれば歌は何處に求めよう、人生宇宙の神祕に對する崇畏敬虔の念ありて偉大の詩は生れ出づる。葵花の天日に傾く如くおほげなくも我等はこゝに憧るゝ者である。巨大なるエスキューラス、彼には運命の絶望がある、人生の長太息がある、沈痛なるダント、彼は想を幽淵に馳せて遂に天上のホザナを聞く。この人生宇宙の問題に關して侮慢と冷淡と否定との風潮憂ふべき時、一切の敬を敬する著者は不敏を願みずして此小著を眞摯なる大正の青年に捧ぐる。

世界改造の聲盛なる時、東亞風雲の變測られざる時、極端の頑迷者流と極端の過激思想家と兩々相對してシラ、カリブアスの危険を現する時、著者は不才を願みず、人道を尊び祖國を愛する社會未來の中堅にあつかましくも此小著を捧ぐる。

古今東西詩歌變遷の跡を知らず願みず、一瞬時の流行を以て詩歌の本流と見なし、散文詩以外に詩なしと云ふ狂妄の言文壇の一方に聞ゆる時、著者は(十八年前「曉鐘」中にユーゴーを散文詩に譯したる著者は此一體の特長を認むると共に)別に聊か信する處あつて此拙き小著を日本現代の詩壇に寄する。

大正八年四月

土井 晩 翠

釋迦牟尼とトルストイ

五天の夜半星ひかる。――

金殿玉樓――

ほだしの固き迦毘羅城

あとに落ち行く王子の玉貌

眉間の白毫長く照して

魔王魔障の群もひれ伏す、

靈鷲の山高からず

恒河の水長からず、

高きは靈、長きは餘韻。

末世今みな混濁の波の狂に

金欄と紫衣と朱殿と幢幡と

泥に汚れ塵にまみるも何かあらむ。

流風とこしへに香を吐きて

二千年前の大獅子吼

今渴仰の心地に震ふ。

北歐のオーロラ微かに光る——
 人生八十終に近き
 冥想の宿ヤスナヤ、ボリヤナ、
 顧み見れば豪華の青春、半醒の壯時。
 立たんとして立たず、
 覺めなんとして覺めず、
 目は大空の高きを仰ぎ
 足は塵土の低きに這ひしも
 落日最後の光照して
 雲霧を今はの際にたち切り、
 五天のむかし二千年
 青春の王子王宮を
 逃れしあとに遂にならへり、
 嗚呼これ全歐最後の偉靈
 世紀二十の文明の思潮の高みトルストイ。

*

* * * * *

金華山より太平洋を望みて

世界大戦争の初まりし大正三年の十一月一日中島、林の
 兩教授及び科學部員二十餘人と共に金華山頂にのぼりて

太平洋の秋の波を見おろす一千五百尺、
 金華山頂の風わが思を遠く吹く。

「王城去りて一千里、王化洽ねき東奥の
 山黄金を奉つる」史上の聲は遠けれど、
 隔つる波の荒うして名山未だ人界に
 廣く知られず、神仙の府と想像の空にのみ、
 たゞ雲霓の明滅を盲の思ふ如くして
 此日此秋此年にわれ靈境の秘に参す。

蒼鬱たりや千年の古木喬松枝しけく、
 三峽の夜にあらなくに、哀猿耳を貫ぬきて

森より鹿の立つところ時に潺湲の水わたり
喘ぎて上る羊腸の嶮路つくせば忽として
眸にうつる渺々の水か鏡か太平洋。

あゝ大なる太平洋

干潮満潮互に月球の呼吸につれ
大宇宙の莊嚴の曲の一律洋々の

波浪と成りて帝國の岸を洗へる二千歳
不死の仙郷秦皇の夢みし處はたこゝか

時劫の波は永く卷き黄金國の名に酔ひて
西の海客潮分けし其春秋も遠ざかる

さなり春秋遠ざかり時劫の波は捲きされば
知は大塊のはてを窮め理は幻樓を碎きさりて

三山六鷲跡なきもおほいなる哉太平洋
赤道帯の南北みどりの波の幾千里

靺鞨の岸黒龍の水入る處寒潮の

烟に月の眠る處貿易風の吹きあほる
暖潮に魚の飛ぶ處時を同じく寒熱の
季節の變を幾何か巨洋の浪は眺むるや。

二

日出づる國の東奥のこゝ今金華靈山の
天は正しく秋なかば松の翠も満山の
紅葉の榮も一齊に皆白帝の世を語る。

青螺幾百一灣の波しづかなる千松島
向ふ牡鹿の半島の山遮りて見え分かず

こなた近くの群島の蔭人は曰ふ月が浦
一葉むかし南歐の都をさしし門出の地

孤雲幾片悠々の空に泛ぶを望みしや
其地其波其雲はむかし乍らの秋にして。

あゝ襟正す肅清の秋の山また秋の海
長く嘯ぶき天梯を攀づるが如く恍として

大自然のふところに休らふものは我が大か、
主観客観混じとけて一切言句の領を去り
塵骸しばし太清の秋の光に涵さるる。

三

さもあらばあれ空間の薄膜裂かば夕陽の
落行く天の遠きあなた歐の中原戦雲の
渦巻きわたる悽愴の姿日月また泣かむ。

痛しい哉百年の禍永く伏す處、
歐の東南ポスニヤの雲蒸す夏の六月の
空に運命の詛の手放ちし丸の響より、
西に東に大陸の表は修羅の市となり、
天上はたまた轟雷を飛ばす數群の大怪鳥、
海上ひとしく鋼鐵の百の妖鯨火を吐けり。
リネージュ、ナミュル陥りてチュウトンの族二百萬、
颯風の如く霹靂を地上に驅りてあれ狂ひ、

ミコーズ、オアーズ、エーレンヌの流のほとり聯合の
軍大波の打つ如く、東方更にガリシヤに
スラブの強兵數百萬、數も伯仲獨塊の
大軍ひとしく雄叫びて進退怒潮に似ると聞く。

江流秋に咽ぶ時水は暗紅の悲か、
落月雲より覗く時呻吟の聲たえふか、
北地或は寒早く飛雪天地を卷く處
殺氣大荒に漲りて砲烟こぼりて散らざるか。

あゝ黄金の巴里の首府、滿城綺羅の粧は
今悉く憂愁の色に包まれ文藝の
花も色なくうち枯れて只驚惶の影ならむ、
ノートルダムの聖塔は無惨の砲に傷きぬ、
アンワリドの墳の中百年の昔列國を
敵に運命試みし英靈何の夢結ぶ。
火山碎けて降る如き巨砲の猛威鐵塞を

微塵となしてベルギーの假の都をつんざきぬ。
海峽のあなた大川の流を帯びて儼として
豪富に誇るアルピヨンの大都も秋を感ずるや、
リンデン樹下の逍遙も今は見はてぬ夢のあと。

四

遙かに思ふかんばしき地上の星の毒汁に
枯死する如く歴代の精を集めて培ひし
文化の華は戦亂のあらし忽ち吹き碎き、
秋萬頃の豊かなる畑は屍體の收穫か。
天の光明共に受くる無数のやから「民族」と
「國」の名のため仇なくて仇と互に攻めにじり
炎々の火に白蠟の熔くるが如く消去るか。

榴散彈の雨の下影も留めず碎け散り、
或は千仞蒼溟の底に白骨漂し去り、
或は利劍の錆となり或は星泣き月むせぶ
夜半に焼かれて青燐の寒きを残す牲幾萬、

中に紅顔の春の盛さうび耻らふ色あらむ、
生立ち行かば一世の光たるべき導も、
織らば錦繡の筆のあや染めなば虹霓の影のほひ、
或は學海底深く潜める眞珠探る身も。

其兵亂のくるほひの魔界の暗に似る處、
泥土の中ににじらるゝ花の姿を思ひ見よ、
流弾目なく胎の子と共に斃るゝ母あらむ、
東西知らぬ幼子の四肢碎かるゝ惨あらむ、
逃るゝものも一切の寶を宿を失ひて
此嚴霜の鞭に泣き此慘烈の飢に泣く。
それはた天か人界の正に受くべき運命か。

五

運命爾の神祕なる被衣誰かは剥ぎとらむ、
東亞の空の運命の明日亦たれか測り知る。
大戦亂の一波瀾太平洋に傳はりて
渤海の岸青島に今皇軍の進む見る、

孤軍外より援なき要塞程なく倒るべく、
 水は濃藍南洋の天亦光る旗とぼむ。
 是より東洋日に多事に又甘眠の時あらじ、
 轟雷未だ聞かずとも既に閃電の火は映る。

あゝ漫々の太平洋波は隔つる三千里、

金門峽の星の旗閃く處秋いかに、

西の隣邦人ありて今同文の祕を知るや、

黒龍の水北辰の光は常にやさしきか、

恒河五天の夕ぐれの秋澄みわたるいつ迄ぞ。

機は風雲の變に似て形勢次第に推し移る

其大局を玲瓏の心の鏡寫し得て

經綸の策誤たず二千餘年の帝の邦

わが極東の光明を放て、——亞細亞の暗は足る。

六

嗚呼靈山の頂の秋逍遙のわかき友、
 その紅頬は豊かなる望の春の曙か、

來る東亞の運命を双の肩の上荷ふもの、
 「列強の中、一流の虚名に迷ふこと勿れ。」

野人自尊の醜きを自らさらすこと勿れ。

爾の眼を光明に開き世界に知を探せ、

徹と錆とを心より剣より拭へ、陋習の

朽ちしを棄てよ、新たななる酒は新たな器に注げ、

迷夢久しく妄影の身にまとわるを斬り拂へ。

深きに入るは精に因り聖きを知るはたゞ誠、

四海あまねく照すべき偉大の想と藝術と

科學となくば邦國の光榮遂に何の意ぞ。

心霊の力盡くるなくおほいなるもの我にあり、

起ちて世界の文明の潮新たに捲き返し

太平洋の朝波に新たなの歌を呼ばしめよ。

七

嗚呼金華山千歳の昔に聞きし黄金は

今其胸に空しとも靈境永く靈ありて

無聲の教登臨の子にとこしへに施すか。

感謝を受けよ、名山の鎮むる處東海の
此邦永く愛すべく此民永く頼むべし。

秋や漸く深うして今満山のくれなるの
錦繡やがて雨と散り驚嘆空にうづまきて
萬物悉く枯れ果つる其惨悽の時去らば
春や再び回らざらむや。

雲今歸れ碧海の夕、
風今睡れ青天の限、

落つる日五彩の虹霓を染めて
烟波夢むる遠きあなた

大圓輪の影を隠すも
金波しづかに曙光に笑みて

光榮の太陽また明日を照さむ。

(一) 天皇の御代榮えんと東なる陸奥山に黄金花さく「大伴家持

(二) マルロポロ以來歐人東亞に來るを曰ふ

(三) 支倉六右門羅馬に向ふ門出の港

(四) ナホレカン

愛と哀

紫の雲のたなびき

紅の霞のほひ

こなた暁光の生るゝところ

こなた歡喜の湧きいづる郷

こなた「永遠」のほゝるめる空

こゝに「愛あり」といふ。

うす暗き狭霧のとぼり

褪めはてし虹の面蓋

あなた希望の消え行く處

あなた涕涙の湧きいづる源

あなた「流轉」のうなだるる空

そこに精あり「哀」と名づく

造化そもそも何の心ぞ

無象の玉繩天地にわたりて

此の兩極の二靈を繋ぐ。

見よ「愛」つねに「哀」にともなひ

「哀」とこしへに「愛」の影追ふ。

夜

一つの太陽隠れさりて

千萬の太陽現はるる時

近きもの小さきもの浅きもの皆影ひそめ

遠きものおほいなるもの深きもの皆出づる時

大靈のあらし永遠の海をめがけて翔くる時

沙漠の大獅子鬣に露を亂して覺むる時

心海の波浪しづまりて大聖曙光を待ちわぶる時

千萬のまぼろし飛びて詩人を廻る時

あゝ夜よ、玄妙の精、何の言葉に君を讃ぜむ。

雨

滴

わが心臓の脈搏に

答へてこよひ檐の玉水

しらず何等の有韻の歌ぞ

天地を包む暗の胎より

來りて去りて不可知に到る

世々の惱の數とや、なんぢ

もしくは億劫久遠のあなた

救はれ天に再び歸る

サタンの感謝の涙か、なんぢ。

冥府の白薔薇

光に遠きよみの底、
 憂のあらし、恨の風、
 望のうしなひ、つきせぬ惱なごみ、
 魂みな焔の泥の海に、
 鐵の鎖につながれて、
 苛責の鞭に泣くところ、
 見よやけはしききりぎしに、
 ましろき薔薇の花さけり。

あゝ白さうびさきにほふ、
 望のあけぼのほのみえて
 あゝ戀の花さきにほふ。

「サタンは冥府に消え失せぬ、

いみじ再び光の子
 ルシファ天に生れいでぬ、
 喜びあれよ、億劫の
 未來の遠きあなたより
 あゝ君きかずや洩れくる聲を。

亡國の恨

「冬王」の威嚴のはじめ
 満山の過ぎし粧ひ
 錦繡の榮を誇を
 一場の夢とし拂ふ
 すさまじの風のあらびを
 惨悽の思に聞きて
 聯想はセルビヤの惱の上に。

亡國の四百萬人
 逃るるはいづこの谷ぞ
 隠るるはいづこの山ぞ
 一片のパンを争ひ
 同胞の血汐流して
 獸性の狂ひを見する
 現實の冥府の苦惱。

ベルグラード月黒し、
 ニツシの空雲悲し、
 啾々の夜半の叫び
 哀々の野末の咽び、
 昨日は花、今日は荆棘、
 先は玉樓、今は破滅、
 大靈の光の前に
 人間はかくも苦しむ。

東海の萬里のこなた
 亡國の恨を想ふ
 一片の心のいたみ
 こがらしの夜半のひびきに
 窓押せば天の萬軍
 永遠の神祕の謎
 星は皆またたき震ふ。(一九一六)

警めよ

心せよ「焦眉」の言葉あまり鈍し、搏撃近し三千里、
 寸時に怪鵬南に翔けむ、
 銀座街一萬の家、十萬の人と寶と一聲の、
 天魔の弾に碎けし夢よ。
 想ひ見よ天魔の叫び、百團の焰と化して極東の、
 滿城の春に落ちかゝる時。

飛行機の定義下さん、歐米の空に飛ぶもの、極東の空より落ちて木にかゝるもの。ウラル山越して毒吐く獨探の群雲のごと寄せ来る、さめずや東亞未曾有の危機に
(一九一八・二月 萬朝報)

天 魔

樂園のバリに豪華のロンドンに

見よ天上の大魔軍

焦熱地獄また湧かしむる。

對岸の火とおろかにも眺むるや

霹靂飛びて一瞬に

關八州を焼かん日想へ。

天睨み齒をくひしぱり足摩りて

怒るも遂に遅からむ

百の雷霆鳴り落つる時。

頼めりや頼むまじきに、シベリヤの

大平原をまつかうに

毒煙毒霧吹きよせ来るに。

高樓の歌吹の海のたゞ中に

猛焰猛火猛雷の

ひゞきと共にふることあらむ。(一九一八・三月)

危 機

樂園のバリの郊外襲ひ来る、大爆彈のとどろきよ、

ああセイヌ河波しづけきや。

鋼鐵の長蛇の陣を布きかため、ソナムの岸にチュー

トンを、マルヌの如く攘はんはたぞ。

ナポレオン旭日の如く榮えし日、その亡びんを豫言

せし、ワイマア侯に倣ふべし今。

聲のみはあらしの如くよもに飛び雄々しかりしよ

三萬の飛行機いかにあはれアメリカ。
元帥のヘイダ―アングロサクソンの誇り、世界の
見るところ、怒潮と寄する敵打ちばらへ。

(一九一八・四月
朝報)

長 大 息

- 一 鴛鴦の契短く濃艶の
花時ならず碎くると
- 二 暮雲色なき夕に聞くか
櫻、咲く郷を踏まじと叫び去る
中華幾千青春の
血を湧かしむるたが咎ぞや
毒弾と毒瓦斯使ふ人々の
無形の毒はいやまして
三 こゝに大和と支那とを隔つ

- 四 楊柳の渡に東かへりみて
悲憤の涙同文の
- 五 邦な詛ひそ意馬の狂に
江陵の一夜の雨としぐるゝや
東海さりて一千里
- 六 客衣につゝむ憂の雲は
大息を何に托さむ極東の
百年の策日と支の
- 七 唇齒陸まで何によらむや
極東の經綸の策千載の
危機にあたりて謹めよ
- 八 血は水よりも濃しと知らずや
四百州日うらゝかに空青く
東亞むらがる妖雲を
拂はん風の吹くよしもがな

(一九一八・五月
朝報)

歐洲戰局詠

巨大なる偶像倒る。——昨日まで

北の寒光歐に亞に
あびせし畏怖の的いづくぞや

ペートルの起りこのかた二百年

歐亞にわたる巨大なる
邦か沙上に建てし堂宇か

奸佞のたくらみ世々の禍を

積み來て斃る忽然と
心の腐れし巨木の如く

奸佞の賊徒おのれの權により
威を固むべく蒼生を

咆哮まさにはじまらむ

國敵は潮と寄せて百萬の

民は飢寒に亡びゆく

現世の地獄ペトログラード

一億の罪なき民を顧みよ

過ぎし百年蒙昧の

暗に蔽はれて邦今亡ぶ

敵軍の間諜影を潜まして

玉座にありと人間の

いづれの歴史さきに述べしや

神聖の玉座四海をおほふべき

威のよるところ忽然と

民の怒に碎け散る見よ。

大悲劇新たに綴るソホッレス
九泉の下さめいでよ
ロマノフ朝の世々の詛を

ひんがしの巨像倒れてチユートンの
兵二百萬引きかへす
西の風雲今正に暗く

フランダー固めし山河おほひくる
黒雲あつく電光に
伴ふ雷の音すでにひよく

百年のむかしフランス身ひとつに
聯合軍と戦ひて
夢と覇業の消えしほとりぞ

シヤムバニイ百里にわたる砲陣の

おろかになせし罪惡のはて
日月いたみ風しばし黙す

時移りいくたび替る運命の
潮ぞ——北のチユートンの
猛威しばらく今あれんとす

東方の武の聖經は奸雄の
二目にまだ入らじ——やがて見よ
『百戦百勝國亡ぶ理を（一九一八、四月六合雜誌）』

血潮の狂ひ

左の一篇はシラが『ローレンシュタイン陣營』の結末に
於て大將軍の部下に歌はしめしもの、「三十年戦争」當時の
面影はた現時獨逸軍の荒べる心正にかくの如からむ。

一

いざ／＼ 同胞わが馬驅らむ
いざ／＼ 戰場自由の郷に、
戰場たゞ見る男子のしわざ、
猛なる心ぞかしこに躍る。

健兒に代るははたして誰ぞ、

あゝ彼たゞ身を頼みて立たむ、

合唱 健兒に代るははたして誰ぞ、

あゝ彼たゞ身を頼みて立たむ。

二

自由はこの世を逃れて去りぬ、
残るは君王奴隸の二類、

怯れしともがら恐の群に

力を振ふは虚偽はた詐謀、

たゞ「死」に面を合はして恐ぢぬ

勇卒のみわが自由のやから。

合唱 たゞ「死」に面を合はして恐ぢぬ

勇卒のみわが自由のやから。

三

現時の苦辛は抛ち棄てぬ、

四

辛勞恐怖の影今とめじ、

運命めがけて馳せ行くわが身、

今日もしあはずば明日はた逢はむ、

運命あしたの身に逢ふべくば、

命のうま酒今日こそ酌まめ。

合唱 運命あしたの身に逢ふべくば、

命のうま酒今日こそ酌まめ。

樂しき幸運天より下る、

辛苦の勵みは無用のしわざ、

大地の胎より寶を求め、

寶をあさるやみじめの農奴、

生ある限を穿ちて掬ひ、

やがては己の墳墓を穿つ。

合唱 生ある限を穿ちて掬ひ、

やがては己の墳墓を穿つ。

駿馬をかりくる雄々しき勇士、

あゝ此賓客「恐」を率る、

五

燭光目ざして婚賀の席に
呼ばれず請はれず強ても寄せつ。
甘言用ひず黄金見せず、
あらしの最中に落花をにじる。

合唱 甘言用ひず黄金見せず、

六

あらしの最中に落花をにじる。
少女よ悔しき涙はなぞや
とく／＼遠くに我こそ立ため、
休はとこしへ地上にあらず、

誠の戀はた守るは難し、

はけしき運命勇士を驅りぬ、

平和はいづくの郷にもあらず、

合唱 はけしき運命勇士を驅りぬ、

平和はいづくの郷にもあらず、

七

いざさは戦友馬上に進み、
劍火の狂に共胸さらせ、
青春湧きたつ血潮の誇、

立たずや雄心冷えざる中に、

なんぢの生命賭くるをなさで、

いかでか誠の生命あらむ。

合唱 なんぢの生命賭くるをなさで、

いかでか誠の生命あらむ。

エルエーレンの『祖國の破片』

(白耳義大詩人の最後の詩集『戦の赤き翼』より)

はて無き世界のたゞなかにこれ唯小き一片の地、

これこの北の地、

膚をつんざくあらしを孕む、

これ海原を界とし目の前不毛の野の布ける

小さき微けき地球の破片。

あゝこれ尺寸大地の一塊、

さもあれ今なほ君王王妃
はたまたかしづく民の愛
残り、嚴冬氷霜なぞや、
すぐれし此郷猛火に狂ふ。

その君王の威によりて幾團の勇士泥濘の
塹壕の中すみよりすみに
武名を揚げつ、
はた大水の漲り溢るリゼール淀みて
昨日迄林檎花さく枝の中
鳥の集くひし果樹園を今一面の海と化す。

ヂスミユウド又その砦ニイボール又その運河、
炬火に類せる高塔を含めるフルーン、
あるは猶ほ生き、或は又霰彈の雨に碎けぬ、
あゝ天軍の天翔けるあとと眺めし蓬々の
白雲飛べるフランダールの碧の空。

誰かなんちに戦雲のみなぎる今日を測りしや。
なんぢいみじき大空の下に光榮また悲哀
かはるゝに現はれまじる、
あゝ一團の神聖の名ウルベン、ベルキズ、ラムカベル、
なんぢの鐘樓の傍に巨大の墓の中にして
猛威猛勇戦場にふるひし勇士今眠る、
生ける間めでし郷土今親しく彼等を招き呼び
屍を包む白衣無く納むる棺を缺けりとも
祖國ぞ愛の抱擁に彼等の骨を葬れる。

その墓標の十字架の間歩みをめぐらして
光榮の昨日千代ませと彼等讃ぜし皇后の
宮こそ衣冠整へて逝きし勇士のため祈れ、
あゝさびしの姿つゝましけの影
思に沈み佇みて、斯くて夕ぐれ迫る時
砂原さして悄然と暗の深みに消え給ふ。

又こなたには聖徒の再生わが君王、
 歴史の今成る場より出でて
 泥濘深き悽惨のリゼールの岸おとづれつ、
 等しく黙然思に沈み、手勢にまじり一齊に
 曠野わたりて海近き
 さびしき館にさり給ふ。
 あゝフランダールつらく、さびしく物すごく
 爾の生ける姿はかくぞ、
 光榮竝に其火焰、悲哀ならびに其灰の
 たゞ中なんぢの生けるはかくぞ。
 更に増すことあり得じと
 思ひし愛に昨日こそなんぢめでつれ、今にして
 あゝフランダール艱難の中になんぢに伴ひて
 なんぢにはべり冥宮の領の界にいたるまで
 續く無邊の熱情の湧くを我こそおもほゆれ、
 しかも今こそ妄念と悲憤の日なれ、わが心、

なんぢの不幸艱難のさらに増せとし祈るまで、
 命を牲にいや深く更になんぢを愛でんため。

無韻の哀歌

世界大戦に参加し、地中海方面に遠征したる、我帝國艦隊
 の戦死者の記念すべき墓碑は、豫てマルタ島に建設中なりし
 が、四月三十日、靖國神社大祭の日を卜して納骨式を行ふ旨、
 佐藤艦隊司令官より報じ來れり。

シシリイの南 波捲く 濃藍の
 光を返すマルタ島
 やまとますらを 其の骨埋む、

地中海 怒濤の中に 東海の
 やまとますらを 動を
 残じ マルタの島に眠れる。

アフリカの岸の北なる千重の波
波の鼓樂を夜に日に
聞くや眠るや やまとますらを。

イオニヤの海の潮風 東より
寄するマルタの島の塚
故山の夢はありや通ふや。

マルタ島 土と やまとの丈夫は
化しぬ 之れより此の里の
薔薇 いよいよ香は高からむ。

マルモオル アラベスタアを刻みなし
友のかたみを 遠征の
將士泣きつゝ マルタに建てむ。

地中海 波靜かなる夜半の空に

汀の薔薇香を吹きて

無韻の哀歌 勇士にたむく。

濃艶の色彩 なかば熱帯の

花と空とを色彩らむ

其の島染むる やまとの血潮。

東海の霞む波間を わけいづる

暮春の月よ 三千里

光を送れマルタの塚に。

成るべくは 大和の櫻苗わけよ

薔薇と共に ますらをの

マルタの塚に 永久に咲かせん。

マルタの發音正しかられど、暫く世間に倣ふ。

又薔薇、マルモオル、アラベスタアは、同島の特産なり。

河 内 鑑

六百の國の干城火に焼かれ
水に溺れし周防灘
波よたがため今日緑なる。

火に焼かれ水にさらはれ六百の
ますらを逝けり極東の
風雲あらび行く時にして。

魔を碎き妖をしづむる鋼鐵の
生ける堅城忽ちに
六百の魂ともに亡ぶか。

生き残る壯士泣きつつ丘の上
たなびく茶毘の烟見る

よべはハンモク觸れ合ひし友。
國に仇なすべき敵に備へたる
猛火の藥我とわが
國の干城斃ししぞ憂き。

忌はしき世の疑よ空しかれ
扶桑千載何處にか
國をうらぎる賊を容るべき。

周防のうみ徳山灘の波あらく
六百の靈亡びしよ
艦は造らばまた作るべき。

レピンを憶ふ

レピンは現代最高の畫家の一人、其作は世界的有名なるもの多し、過ぎし日饑に倒れしといふ。

崑山の焼けて珠玉と頑石と
共に亡びし跡や斯く
あゝ革命にレピンも斃る。

天上の虹霓の色溶かし來し
巧は饑を補はず
あゝ名工は食無くて逝く。

旅順口エレスチャーギン水雷に
碎きし恨深かりき
今はたレピン饑ゑ死なんとは。

大倭瑞穂の邦に米無しと
叫ぶ動亂彼にして

大露の騷レピンは饑ゑぬ。

ザアは銃にレピンは饑に俱に逝く
革命の波何物も
洗はずしては止むべからずや。

「帝王の囚はれ」寫し「牢獄」の
恨み畫きし君にして
糧なき故に今逝かんとは。

「召集の兵の別れ」に斷腸の
思寫しし一時や
君戦亂の餘袂に逝くか。

秋立ちて今宵西窓雨暗く
檐のしづくも思あり
レピンの饑ゑて逝けりと聞けば。

太平の世にしありせば沈む時
 五彩のほひ榮光は
 夕日の如く照るべかりしを。

(一) (三) (三) 彼の傑作

(一九一八・九月)

ロマノフの滅び

大悲劇シエークスピアとソホクレス
 二人の筆を合せ得て
 描きいづべし、ロマノフの運。

冬宮の誇、金殿玉樓の盛一時
 天上の花吹き散りし
 ロマノフの夢。

北方の生ける神祕と極みなき
 威嚴と兼ねしロマノフの
 最後の姿血に染み倒る。

あゝウラル、夏や淋しき紫の
 ころも珠玉の冠を
 嘗ては着けし屍俯伏す。

萬乗の尊き棄てて、百億の
 富失ひて、ロマノフの
 最期、ウラルの夏暗き空。

ウラル山麓の夏の空暗く
 静けさ破る銃丸の
 音にニコラス二世は倒る。

皇天の愛の眸は何と見る

過去の百年悪政の
罪の報にたふれし子孫。

洪水の逆捲く姿、荒れ狂ふ
猛火の姿、民衆の
怒の前に何もものか活く。

黄金の冠をすてし昨日より
危み見つる運命の
はやもウラルの麓に盡くる。

富に威に權に神祕に、何ものか
敢て比べし、今にして
見れば頭に積みたる薪。

黄金の冠戴く身のつらさ
悟るもすでに遅かりき

野狐に其威を借られしも憂し。

ニヒリスト、アナキストの究竟の
理想も遂に及ばざる
現實斯くと誰想ひしや。

牡鶏のあした告けしは魔の叫
さらぬも重き積悪の
報、かくこそあるべかりしか。

啾々の恨陰靈霧深き
湖北の野に詛ひしか
あまりにむごきロマノフの末。

二十世紀、そのいやはじめ黒龍の
流五千の支那の子の
溺れし魂の恨もあらむ。

つどふ五城ごじょうの樓の下
盟はむ昇る東海の
旭日の邦に盡す身と。

三

幽蘭咲きてかんばしき
花をかゞみに睦み合ふ
同じ窓なる友と友
見ずや大空ひたす水
深きにわたすわが業も
愛と愛との胸つなぐ。

四

青葉みどりの色深く
流廣瀬の岸にして
高き遠きにあこがるる。
土くれ積もる果を見よ
銀浪山と崩るゝも
もとは谷間の幾しづく。

五 三年さんねんの後は西東

いづれ別るる恒山の
四鳥の途は替るとも
替らじ盡す身の誠
友工會の名のはまれ
思へ嗚呼友我が責よとと。

五城寮々歌

(在京仙臺學生の
求めに應じて)

建國このかた無雙の我世
國運いづれの肩にか乗らむ
知らずや東北天地の秀氣
雲蒸久しく時待ちきしを
青春わが世の花なる盛り
故山のおとづれ語らひ睦ぶ

健兒の一團やどれるわが舎。

風雲いくたび東亞の空に

これより荒ぶを誰かは測る

あゝわが東北強者の故郷

なんぢの使命の重きを知るや

その精その英その髓たれと

ひそかに望みてあしたを待てる

健兒の一團やどれるわが舎。

圖南の鳳翼風まちわびし

英魂なほ住む五城の夕

廣瀬の清流宮城の錦

鹽松金華のほまれの山河

人文ひとしく榮えもゆけと

故山を思ひて夢また似たる

健兒の一團やどれるわが舎。

尙綱女學校々歌

橄欖山の夕ぐれの

歌いま遠し二千年

山さくるとも搖なき

愛と望と信の道

きよき教の御ひかりを

こゝに八洲の東北

大和なでしこ姫百合の

花に蕾に浴びしめよ。

金華松島鹽釜の

ゆかりの郷の春と秋

色もにほひも大能の

御手のたくみのあとと見て

酌めど盡せぬ意を探る

身は清曉の露含み
浮世の塵をよそにして
風に香を吐く白さうび。

青葉廣瀬をまのあたり

「錦うがちて綱尙ふ」

深き警め心して

教の庭にいそしめる

嗚呼わが姉妹知を集め

操をみかけあめつちの

神の御榮あらはして

道と邦とにつくすまで。

木更津中學校々歌

遠く富嶽を西にして

東京灣をまのあたり
わが木更津の中學に
健兒幾百青春の
心と身とを練りきたふ。

激浪山とさかまくも
もとは谷間の幾しづく、
日々の歩みのつもり行く
千里の道を顧みて
あゝ紅顔の子よ奮へ。

東亞これより風雲の
あらびあらじと誰が曰ふ、
健兒わざ成るあしたの日
廣く四海を家として
邦と道とにつくさでや。

剛健の徳破邪の意氣
 つねに進みて怠らず。
 明鏡塵を絶つ如く
 心の光照らしめて
 永く理想のあとを逐ふ。

北野中學校々歌

- 一 六稜の星のしるしを
 青春の額にかざし
 紅顔の子弟幾百
 日に通ふ北野中學。
- 二 そのむかし難波御堂に、
 堂島に次ぎて北野に、
 育英の門を開きて

四十餘年花は薫りぬ。

- 三 淀川の深き流よ、
 六甲の雲るる嶺よ、
 名にし負ふ大阪の城
 天才の高きかたみよ。
- 四 天然とはた人間と、
 とこしへにわれの鑑かん
 眺むるも胸のときめき、
 嗚呼友よ奮はざらめや。
- 五 大東の邦の運命
 青春の肩にかゝれり、
 あゝ母校北野中學
 その健兒勵まざらめや。

函館中學校々歌

玄冥の北の一道
關門の岸にのぞみて
青春の薫にしるく
基おける育英のには。

つどひ寄る五百の子弟
人生の花のほころび
身を鍛ひ心をねりて
向上の一路をたどる。

宇賀の浦萬頃の水
駒が嶽千仞の山
微をつみて高きにいたり
滴より空をも涵す。

形ある無言の教
仰けわが紅顔の子ら
業成らば雙の肩のへ
此國の運も負へかし。

母校の名子弟のほまれ
花と香とつねに伴ふ
任重く道遠きを
あゝ健兒勉めざらめや。

宮城女學校女子青年會々歌

一 天に榮光
地に平和
人に恩寵
あけくれに

口々に織る糸の
 あやを心に差ひ了るる
 粧ひつつ
 聖なる業に
 いそしむ身。
 四 鳩のやさしみ
 清淨の
 操みどりの
 橄欖の
 色はとこしへ
 人の世に
 神のほまれを
 あらはさむ。

* 神のほまれを
 * あらはさむ。

祈る尊ま
 御教の
 光を仰ぐ
 姉妹
 二 あゝ曙よ
 光明よ
 春よ望と
 愛と信
 嵐も雨も
 叢雲も
 われには示す
 明日の晴。
 三 わが名にし負ふ
 宮城野の
 錦の郷に

科學の光 (新短歌十六首)

乾きたる味なきものと喙味の
眼まぶたや眺めん詩のかほり
美のあや充つる科學の世界

赤熱の金輪めぐり炎々の

火焰のつむじ吹き捲きて

萬劫の後薔薇花咲く(地球に於ける有機物發生の歴史)

アミイバの小さき命の一つだに

太陽系統千萬の

年の進化を待たで成らめや(同上)

テールの上テールに迷ひて行く道を

蟻失ひぬ大漠の

千里さまよふ旅人の姿。

一吹の烟草の煙窓ぎわに

悠々としてたなびきぬ

暮山に歸る雲の姿か。

青葉山青苔あつき岩の下

巨鯨の骨を掘りだしぬ

幾萬年のむかしの海ぞ、

金華山沖のあなたに鯨鯨の

群こそ遊べ、そのむかし

青葉廣瀬も大海にして。

想像の力及ばじ幾萬の

春秋去らば青葉山

大空涵す海に返らむ。

そのむかし鹽釜の浦千松島
影いかなりし萬仞の
嶺か千丈緑の底か。

小宇宙宜べし其名よ億萬の
原子群がり極小の
恒星遊星みな備はれば。

『無限小』大と等しく詩を含み

美を莊嚴を玄妙を

兼ぬるをいまだ歌ふ人無き。

おほいなるアリストタカス太陽を

大地廻ると照し見ぬ

一六二千二百の速きいにしへ(西曆前三世紀
ケリイヌの人)

羽あらば登らばいかに天界の

姿いみじく目をうたむ

恒沙の數の星みな詩なり。

一秒に百里を走る速さもて

十六萬里火の雲は

わが太陽のおもより飛びぬ(太陽のプロミネンス四十
萬英里に達せし事あり)

天狼の緑を凝らす光見よ

大日輪を千あはす

巨大の星の震ふ光を(シリアスの容積
太陽の一千倍)

ヤベタスの衛星の夜より眺め見る

土星の姿いかならむ

三重の大環虚空をわたる(土星の衛星中ヤベタスの軌道は
土星のと異なる平面上にあり)

* * * * *

秋山中將を弔ふ

刻々に風雲移り極東の
危機迫り来る今日にして
秋山眞之中將逝きぬ。

歐洲の大戦亂の第五年

春立ちし日に君逝きぬ
維文維武稀世の光。

幾たびか東亞機運のうつろひぞ

「舷々摩する」海戦を
君の靈筆世に告げてより。

想ひやる「空は晴るれど波高き」
對馬の沖のあかつきに

筆を投じて立ちけん君を。

(敵艦見ゆとの報に接し聯合隊艦は直ちに
出動撃滅せんとす本日天氣晴朗なれども波高し)

日本海大海戦を公けに

告げし筆の香千歳の
末に名残のにははざらめや。

對馬沖なごりの波の高き時

血潮の脈も高鳴りて
大文章は湧きいでつらむ。

三笠艦活けるが如き鋼鐵の

中に文藻練れる時
天風海濤靈を添へけむ。

蘭の秀菊のかをりか其庭の
訓のほどぞ忍ばるゝ

陸と海とに珠ひからしむ。

(中將の兄に陸軍大將秋山好古氏あり)

生けるまに一目かはさず忽ちに

將軍逝くと聞く夕

廣瀬の岸の星春寒し。

桐ヶ谷に煙たなびき青山に

土の香寒し四大いま

散りて英魂天に歸るか。

阿修羅軍ふたゝび敗れ天上の

凱歌新たに成るべくば

將軍の靈まづ命受けん。

また想ふ雲錦裳の粧ほひに

君や天上筆とりて

世界平和の頌綴らんか。

(大正七年二月)

川

川は一切の哀樂を率ゐる――

梢の花をのませの草を

紅の香をみどりの聲を

載せてあなたの大海に

ひろき涯なきおほうみに――

あした朝日の莊嚴をやどし

ゆうべ夕日の沈痛をうつす

その大海をめざしてぞ行く。

行きてまた行き流れて流る。

死よその影いづくに潜む。

生よその聲いづくにか湧く。

夕しづかに風吹きて
さよなみにほふほとりより
仰げば空に咲きにほふ
花か星か天の萬軍かれも又
無窮に出でゝ無親に歸る。

黄河の水もかゝりしか、
『美なるかな水、洋々たりや
丘のわたらざるは命なり』と。
春秋遠し二千年
賢者の非命を岸へだて。
きゝし至聖の見たる流も。

羅馬萬神堂「ラファエロの墓を訪ひて

白衣の僧侶群がりて

夕べ祈の歌高く
香煙しきりに立ち昇る
其一院の穹窿の
うつろローマの天を見る
めぐりの圓柱三十六
むかし十二の神の像
並びしあとは残れども
今オリムピア雲暗し。

* 此堂の天井はうつろ也

その神々のよみがへり
微妙のほひあけぼのの
紫夕の紅の
精や溶け來てその筆に
しみしや萬古とこしへの
春を活かしし大畫聖。

運命の寵かはた忌か
 青春の夢三十六
 楊柳の姿、春風の面
 朽ちぬ香骨世にとめて
 ふさはしここに「萬神の
 堂」にラファエロ埋りぬ。

天才讚頌

ベツレヘム、ユデヤの村にたぐへんか
 ちさきウルビノなんぢより
 萬古の畫聖ラファエロうまる。
 シスチナのカベラに巨靈天と地と
 冥府より寄せて君が手に
 宿れり聖のミケランジェロウ。

聖に釋迦基督を見る、人界に
 萬能のオレオナルド
 ダ、キンチイの摩訶不思議見る。

七彩の虹霓溶けて南歐の
 春に降れるを掬びしや
 絢爛の權化、老チチアノウ。

天上のあまりはけしき光明に
 馴れて眩じてラムブラム
 偉大の刷毛は暗を帯びしや。

柔軟の膚よ春よ歡樂よ
 詩よ空想よ艶麗の
 つきせぬ泉ルイベンスあり。

その盛り夢と消え行く帝國の

最後の光全歐に
とよめて匂ふムリリのたくみ。

歐羅巴誇りは何か藝術の
花と科學の光明と
ほまれは聖に優るとするや。

大亞細亞自ら祝へ人間と
呼ぶにあまりに聖なりし
釋迦と基督こゝより生る。

小島教授を弔ふ

向陵の學の庭に白筋の
秀才幾千はぐゝめる、
隠れし君子小島憲之。

向陵の一つの窓に瀑の如く
流るゝ汗を拭ひつゝ
共に受験の答調べし。

折あらば訪はむといひしかね言を
いかに果さむ飛驒の旅
一夜西風星吹き落す。

精悍の姿若きを凌ぎつゝ
眉打ちあけて語らひし、
今はた露に泡に比ふや。(一九一八・九月)

ルウソウの墓

萬神堂を意味するパンテオン大伽藍の地下室にルウソウの墓あり高
く松火をかざす巨胸棺中より出づるもの之を墓上の紀念裝飾となす。

棺より抜け出る巨大のかひな
光焔虚空に沖れとばかり
巨大の松火高らにかざす。

嗚呼ヂヤンヂヤツクルウソウの

使命まさしく大火焔

千歳長く全歐を

おほひし徴とあくたとを

焚きて再び純眞の

自然の姿見むところ。

セイヌの水を震はしし

「自由」「平等」「友愛」の

おほいなる聲その端を

こゝに開けば驚きて

世の「權勢」と「陋習」と

「虚偽」と「偽善」と「奸佞」と

力合はして天の聲
暗に葬り塵に蹴り
跡を絶たむと勉めしか。

狂へる火焔——革命の

あらび一時——時到期

偉大の思想四海に布きて

天才ルウソウ不朽のほまれ。

塵骸ひきずる苦惱の一生

終れば遂には時世の力

こゝパンテオン神聖の

場にとこしへ先覺の

かたみ留めて世に傳ふ。

セイヌ南に橋わたり

カーテルラタン青春の

血の湧く區劃あとにして

愛はうなたれ情は伏し
 血汐は冷ゆる世の沙漠
 すみにかすかに囁くを。
 あるはほのかにほそやかに
 しぐれ淋しき小夜中に
 薫ゆるも思金貌の
 一縷の香にさまよひつ。
 時にはゆるくまた遠く
 波金色にほふあなた
 世々の愁の凝り成せる
 暮雲の端にたぢろくを。
 銀河の西に傾ける
 夜九天の花の夢
 夢より湧きて降りしや。
 櫻の嶺を汚さじと
 塵を隔つる紫の

サンゼネビイブ丘上の
 空に聳ゆる聖の宮、
 「感謝の祖國おほいなる
 諸靈に捧ぐ」大伽藍、
 ふさはし中にルウソウの
 終のやすみの床は有り。
 おほいなるもの美なるもの
 まことなるもの集りて
 靈火こゝより霹靂を
 飛ばし四海に耀かむ。
 精華ラテンの文明の
 流風千古吹きやます。

ち さ き 聲

聲あり聞かずやちさく遠く――

雲の夕のたゞまひ
 その友の吹きくろく
 霞の中の曲もそれ
 いづれ無何有の郷の春
 春の姫宮おほけなく
 人の世おぼす憐みの
 歌のなごりかあゝ遠き
 あらしの途の遠ければ
 到りたらぬ鐘の音
 淡路の瀬戸の吹別に
 西に東に漕ぎいづる
 白帆に呼ばふ岸の聲
 よしやつばらに聞かずとも
 魂よひれふし寂寞の
 無象の岩戸押し開き
 狭霧むら霧千里の霧

暗濃き霧をつらぬきて
 ほのかに匂ふ靈臺の
 光認めよ——聲あらむ。

流 轉

雲の遠嶺花の色
 崩れて褪めてあともなし
 三春の蝶彩深き
 翼は露に朽ち行きぬ
 夕ぐれしはし天上の
 粧ほのみる虹とも
 淵瀬をもとの姿にて
 水は幾度遷りしや
 自然のあとを玲瓏の

光凝り成す心海に
 寫す尊とき世々の文
 その百千の系統の
 教も去りぬ藝術の
 春も短し莊嚴の
 淨界照すかゞやきの
 「智慧」の愛すら脆うして。

「憫」の權化光の身
 諸天の天の榮光を
 おりし大御子ゴルコタの
 野末夕べの枯れ蓬。
 恒河のいさご盡くせざる
 流轉無窮の劫のあと
 憐みおぼすまなじりは
 宿す大悲の秋の露。

崩れし高き世々の夢
 淨化の時は遠くして
 聖のかしらは荆棘の
 冠のあけに染みぬとも――
 見るべからずや崩れたる
 宮に碎ける世の夢に、
 はたまぼろしに、人の子の
 無窮の靈の尊とさを。

南米に行く人に

行程一萬三千里、
 人は南の十字の星の
 萬古の姿聖なるもとに、
 茫々の大野地平線を限り
 時ならぬ滿地の雪と

群羊のうづまくところ、
 はたアマゾンの大水の
 岸に珈琲の森しける郷。
 行け行け大地は脚下に廣し、
 太平洋の波捲くあなた
 東海照す日いづるあなた
 自由の大氣を自由に吸ひて
 新たな日本を新たにたてよ。

ワイマアにゲーテのあとを訪ひて

薫風通ふ春五月、
 カスタニイの葉しけり行き、
 桃と梨とのみだれ咲く
 中にかすかに鳥うたふ。
 おほいなる靈すみし場。

オリムピヤの電火、
 パーテノンの春風、

光は語り暗は歌ひ、
 樂はおどり虹は舞ひ、
 萬象ひとしく詩に入りて
 全歐の思潮こゝより湧きぬ。

關山千里踏み破る
 霸王の跡は夢なれど、
 情海永くおほいなる
 波を湧かしし跡消えず、
 思想の流浩蕩の
 潮の溢れ行くところ
 境へだつる邦も無し、
 此生神の恩寵と
 感謝捧けて八十の
 圓滿善美光榮の

生の終に天上に
 靈たちさりし跡こゝか、
 『更に光』といやはての
 聲は何等の標象か、
 無窮を翔けて星辰の
 ひらめく處萬軍の
 中に今なほ雲錦の
 裳を垂るゝ影あらむ。

同

詩人の宿のあと訪へば
 花一叢ひととせのたそがれや、
 イルムの流しづかにて
 雲こそねむれ春の岡。

『やさしき河よ流れ行け
 心ものうしたのしみも
 はた口づけも過ぎさりぬ、
 まことも斯く』と歌ひけむ。

しらべを歌に合せつゝ
 谷間に添ひて行く水の
 流に耳を傾けし
 君のあとこそ忍ばるれ。

霞もかほる岸のへに
 流にとめし面かけよ、
 あすのいづくの思出か
 イルムの水よあゝさらば。

*

*

*

*

岳陽樓

- 一 焼けしとの音づれ眞か洞庭の
太湖にのぞむ風流の
權化と高き岳陽樓は。
- 二 生れ落ちて四十幾年縁薄く
夢寐に思ひし洞庭の
名勝一つ今消え去るや。
- 三 君山の嶺をあなたに洞庭の
太湖は四萬八千頃
心眼今も高樓を見る。
- 四 想ひ見るその洞庭のあさぼらけ
夕の光長江を

呑み遠山を含む姿を。

- 五 「慶曆の四年」しかぐ幼くて
范文正の文により
先づ名を記せし岳陽樓よ。
- 六 杜少陵孟浩然の五律より
特に其名をひよかせて
千古かほりし岳陽樓よ。
- 七 岳陽樓焼け落つるとも少陵の
「乾坤日夜浮ぶ」てふ
名詩をうみし不朽のほまれ。
- 八 靈夢の澤今いかに吳楚の郷
しづめ百代百靈を
集まらしめし跡亡べりや。

九 巴峽下り洞庭のおもに舟うけて

岳陽樓を見あけしや
放翁去りて水長し遠し。

十 四百州擾亂絶えず此國の

運命測るひま無きに
岳陽樓は焼けうせつるや。

十一 同文のよしみ二邦のすぐれたる

友太平のあがつきに
つどふべかりし岳陽樓に。

十二 洞庭に比べていかに東海の

誇り名に負ふ千松島
高樓百尺誰か築かむ。

十三 八百の青螺を前に渺々の

太平洋を傍に

大高森の嶺立つを見よ。

十四 松島の大高森の頂に

新たに築き焼けうせし
岳陽樓を凌がしめずや。

十五 誰か何時その高樓の頂に

争永く跡絶たむ
四海平和の頌歌ふべき。

(一九一八、春)

山頂の悲劇

大正七年十月廿三日仙臺第二中學校四五年生百五十餘名長途行軍の
際宮城山形兩縣の境なる熊野嶽に於て大風雪に逢ひ教諭山中筒井の

兩君生徒五島、高平、高橋、安積、池田、小岩井、武原の七名途を失ひて飢寒にたふる。

青春せいしゅんの花の蕾つぼみの百五十

秋深あきふかうして熊野嶽

六千尺の高きにのぼる。

一點の黒雲湧くと嶺上に

見るほどもなく銀箭ぎんせんの

注つくがごとく雨おそひ來ぬ。

やがて雨やがて大雪やがて風

霧またこめて晦冥かいめいの

天地の間苦悶くもんの叫こゑ。

おとに聞くグレイト、セント、ベルナード

其風雪かきせうのおもかけを

忍しのびて若き子等はよぢしか。

落葉らくえつの風に散るごと隊たいみだれ

咫尺しちせきをわかぬ風雪かきせうの

狂くるひの中に皆ちりくに。

導導の影を失ひ弱より行く

聲こゑをしぼりて叫こゑびしか

力盡ちからつきつきつゝ遂ついにに伏ふせしか。

幾度か吹雪ふきゆきの中に見入りしや

その絶望ぜつぼうの弱よりし目

生の本能せいのかうまだ絶つえされば。

「まて」の聲こゑ耐たへよの聲師こゑしの口を

幾度洩あれし救すくひ手の

隊たいの姿をまぼろしに見て。

救すくひ手の聲と聞きしか吹く風を

姿と見しか荒れ狂ふ
吹雪にまじる霧のうづまき。

「一刻は千秋の語を身にしめて
幾度待てる運命の
いまはのきわみ目を閉ぢし迄。

熊野嶽吹雪亂るゝ石室の
中にみたりの教子と
二人の師とは抱き合ひて逝く。

教子を思ふ心の温き
それはた寒さ凌ぎ得ず
尊き性よ神見るところ。

飢勞れ凍え疲れて「馬の脊」を
たどり吹雪のたゞ中に

伏せるは若き四つのしかばね。

あゝ無慘うら若き子ら師と共に
吹雪うづまく深山の
大暗黒の中に凍れる。

大吹雪うづまき亂れ荒れ狂ひ
陰鬼陰靈冥府より
襲ふが如き中に逝きしか。

天上の星のまたゝき雪晴れて
凍れるかばね伏しならぶ
上に一夜の涙垂れけむ。

吹雪晴れ寒く夕の光照る
熊野の嶽の山路を
負はれてくだる屍丸つ。

ゆくゆくも振り返り見る熊野嶽

満山の雪夕陽に
照る大墳墓無限の恨み。

黙然と聲無き天地死の幕に

包まる如き高山の
夕の路を泣きつゝ下る。

荒蕪に包まれ雪にまみれたる

屍かたがは九つ山寺の
夕の床に酷く竝びぬ。

板に似て凍れる衣蠟に似て

白きしかばね煤けたる
小さき燈火かすかに照す。

熊野嶽おりて高湯の村里の

夕淋しき唯ゆゑ法寺
しばし宿しぬ非命のむくろ。

はしき子の屍の雪を打ち拂ふ

親の嘆きに忍びずと
夕日は古寺のあなたにいりぬ。

義に勇み危き忘れをしくも

吹雪の中を返せしか
あゝ紅顔の此の子また逝く(五島生)

恙なくと呼びし別れの一聲を

いまはの際に忍びしか
あゝ逝ける親あゝ逝ける子ら。

大悲劇そのまがつみに顧みて
世の幾萬のわかき子ら

救はれぬべし尊きいけにへ。

山形と宮城とわくる熊野嶽

六千尺を今よりは
牲の教と人眺めんか。

教子と共に斃れしふたりの師

橄欖山の夕暗に
祈りし君の道踏める人。

教子を今はの際にかき抱く

愛の標象、十字架の
教あらたの光添へたる。

おほいなる自然のあらび運命の

わざ——其前に入間の
力かすけしたと伏してやむ。

生か死か神祕の深き大海の

底に誰かは潜り得し、
人よひれふしたと靈に祈れ。

スウルヤ (太陽)

佛國詩人ルコント、ド、リイルガ古エーダ讚頌の一、太陽の歌に擬してよめるもの

おほわだつみの岸に位し給ふ主よ、

大水は君の神祕の御足をぞ洗ふ。
尊き御顔の上御せなの上ゆるやかに

いにしよりの潮こそ流るれ。
汀に散り布く巖の中に

雪のたゞ中に燃る御ぐしは
黒く房なし海の叫と

はてなき風とは傍に狂ふ。

スールヤよ、解き得ぬ「影」の囚よ、
 沙の堆きたゞ中にいね給ふ君よ、
 君が御胸には恐るべき息やどる、
 息は山々の雪を惱まし、
 悲しき暗にうめきつゝ厚雲に
 おほはれ消ゆる星を去らしめ、
 森の莊嚴の胸に通へる
 聲を吐息をむらがりたゝす。

大わだつみの岸の上に位し給ふ主よ
 大水は君の神祕の御足をぞ洗ふ

耀く足に美はしの手に「曙」は

見よ白蓮を帯として來り、

(海のほとりに夢みつゝ君は眠るに)

青き車に薔薇色の牛の四頭を附けぬ。

見よ聖なる棕櫚銀色の楓、

水のへ浮べる清らの睡蓮、

はた香しき雲におほはれ

踊り踊りてせわしなく

仙女アブサラ廻る谷間は

露と焔に浸されて覺む。

七重のおほ空をかけいづべく

いざ七つの鶯色の馬を黄金の轅につけよ、

海吹く風に倦みし疲をふり拂へ

大空とゞろにいざいざ立て。

大わだつみの岸のへに位し給ふ主よ

大水は君の神祕の御足をぞ洗ふ。

大空に舞ふ大鳥にまさりて

おゝ戦ふ者よ、君は勝利の跳に上る。

物の源なる王よ、君は水の如くに流る。

君の莊嚴の御姿に充つる有象のみなくは

君の力、君の威容によりて脈うつ。
 耀く空を走りつゝ、永遠の夜にいたるべき
 君の途こそいみじかりけれ、
 蒼空のあなたに其御車の没らんとし
 莊嚴の地平線はいたくも波たつ。
 おゝスウルヤよ光る御影は燦爛の
 衣纏ひて暗黒の水に傾き
 淵は君を迎へて君の前に開く。
 いざ深き岸に下りつゝ、睡りませおゝ大君。

大わだつみの岸のへに位し給ふ主よ。
 大水は君の神祕の御足をぞ洗ふ。

永遠の時を無窮の空を

貫きはしる耀ける戦士よ

健かなる地の胸に

豊饒の大水注ぎつゝ

燃ゆる嶺のへ南におはす
 大千世界の王なる君よ、祈をうけて守りませ
 おほわたつみの岸のへに君を歌へる
 平和の民を清浄の子らを

太陽の讃

日の本と誰が呼びそめし——新なる

日の本の歌あらたなる

大圓輪の讃歌ふべく。

東海の扶桑の郷をまづ照す

大日輪の光明を

讃じ稱へんあらたの歌に。

野も山もみどりは萌えぬ、冬王の

酷威を掃ふ赫々の
大日輪の恵のかけに。

西の空春の山の上煌耀の
圓輪沈むしづけさや
誰れか火焰の海狂ふ見む。

鐵も石も熔くるばかりの烈々の
夏のまさかり太陽の
散する熱の二十億の一。(天文學者の計算に因る)

太陽の胎を離れし遊星の
ひとつ地球の中にして
生けるもの皆太陽の子ら。

緑の野緑の草のあざやかに
大地貫く生を見よ

偉なり、太陽その生あたふ。

パンヤンの大樹ひとつの根よりして
全森林を造るもの
聲もしあらば太陽をほめむ。

絢爛の熱帯の花清艶の
アルペンの野花一齊に
無言の歌に太陽を讃ず。

暗黒の地底千尺坑道を
穿ち堀りとる石炭の
黒きもむかし太陽のわざ。

かへりみる五尺のむくろ漲りて
流るゝ血潮震ふ肉
いづれか太陽の力ならざる。

太陽を蔽ほひ天地を暗として。
妖魔の如く黒雲の

はびこるかゝる其本知らぬ。

印度洋入る日をひたす大波の

水さざり見よ、一滴も

太陽よりし生れぬぞ無き。

華清宮凝脂を洗ふ温泉の

玉と滾々湧きいづる

その本高く太陽に見よ。

生けるもの生きんがために食を取る

その取るものも取らるゝも

いづれか太陽の化身ならざる。

其光其熱かくて續く年

一千万を過ぎじとや

科學の權威太陽に宣す。

人間の境より見て無限なる

一千万よ大榕の

齡も蜉蝣宇宙のすみに。

富 岳 登 攀

見おろせば雲の大海見あぐれば

雲の大空風寒き

夏八月の富士の頂。

石室をゆりて虚空に哮ゆる風

肌つんざきて冬王の

威を八月の峯に示せる。

見わたせば寶永山の頂に
虹ぞがゝれる、しばしのま

富士の高ねに雲はるゝ時。

夜半の空に聞くは天飈、すゝろにも

わがファンタジイ青鸞と

黄鶴嶺に舞ふと夢見る。

石室の夜半の夢さめ、恍として

下界に吹かぬ咆哮の

富士のたかねのあらしを聞きぬ。

頂をおりて一夜を石室に

すごし古人の句を思ふ

『一燈人は座す白雲の中』

* 袁子方の句

たそがれの暗迫り来て千仞の

黒き峯筋矢の如く

目路貫きて末雲に入る。

雲の海、雲の大波へだつれど

何かはあらむ脚の下

十三州のあけぼのを見る。

五合目の峯つたひ行くうしろより

強力よびぬ『三ヶ月の

湖水あらはる雲の下に』と。

蓬々と袖を掠めて魔の如く

靈の如くに雲すぐる

劔が嶺のへひたにめざして。

黒き砂赤き小石のかさなりを

ゴソと踏み行き攀ぢのぼる
幾百年の前の噴火ぞ。

喬木につゞき灌木影收め

砂に這ふ草また絶えて

緒山赤裸に目の前に立つ。

股根より片脚かけしアメリカの

若き旅人杖により

富士の頂極むるに逢ふ。

石室の狭きにやどる幾百の

むれぞ原始の生にして

面洗ふべき水だにも得ず。

蚊のなきをせめていみじと稱へつゝ
幾百のむれ頭ふれ

背をすりあひて石室に寝ぬ。

のぼり来る行者の鈴に夢さめて

石室の戸よりすかしみる

星影寒し朝近からむ。

喘ぎく黄ばめる面をうなだれつ

よわれる妻の手を引きて

険しき阪を攀ちくるもあり。

先達に取り残されて岩かどに

投ぐるが如く身をもたせ

吐息に嶺を眺むるもあり。

自動車に裾野をかけり鞍の上に

八合のぼり四五丁を

よぢて「登山」と誇れるもあり。

十三と十二と十の子ら三人
 俱して富岳の頂を
 妻もろともに今日攀ぢ登る。

命あらばまたたち返り幾度も

君もろともにおとづれん

富士の神山いやに尊き。(大正七年八月)

わが短歌

わが手觸れわが眼眺めわが心

感ずるすべて玄妙の

神祕に充たぬもの無きを思ふ。

「存在」の意義や何もの一切は

いづれか謎にあらざらん

智慧やそもく何を悟りし。

百年の命短し、人の子の

識に映ずる幾何ぞ

浩々の大海その一しづく。

たゞ心——一より推して十を知り

百千萬億阿僧祇の

世も想像の目にぞ眺むる。

形なき神祕の瑣時を超え

方所を越えてかゝらずや

無線の電波何の暗示ぞ。

靈と靈太平洋の波を越え

ウラルアルタイ横切りて

語るか科學まだ測り得ず。

天高く地厚く前と後とに
 時の無窮に延ぶる中
 蜉蝣の生も意義なしとせじ。

秒の針うごくたびごと人の世に
 五十の墳墓築かれて
 五十の産衣新たに縫はる。

茫々のはてなき虚空一點の
 アークチュウラス近寄らば
 大日輪を百あはす光。

印度洋潮の巨靈左右の手に
 太平洋西二洋とりて
 一萬里程坤球めぐる。

炎々の火球このかた萬劫の

進化を経つゝ人間を
 うみて地球は自覺に入りぬ。

火は水に、自由の意思は必然の
 理法に、矛盾集りて
 一大調和、宇宙は成りぬ。

天翔くる天馬の行くゑ百千の
 凡馬の追ふを許さざる――
 詩人の筆もかゝれとぞ思ふ。

嘶ひなす金鈴の音雲裂きて
 下界に雷と轟くや
 詩人の歌もかゝらましかば。

これ無くて禽獸――ありて人間か
 生のみなもと生々の

天地の靈にひれふす心。

「敬」とこそ神祕の海の一滴を

かすかに覗く人の子が
「無限」の前にとるべき姿。

玄の玄妙のまた妙。一切の

存在の意を思ふ時
魂はそとろにたゞ跪く。

想ひやるはてこそ無けれ人間の

「知」の進むとき一層の
「不知」は必ず伴ひて湧く。

理か法か、たゞ人界に人間の

心によりてありと見る、
限らぬもの名を人といふ。

人間の知をあけつらぶ「知識論」

身の影を逐ふたぐひなるべき。

いかばかり薄くも裏と表との

至聖も遂に比較的のみ。

大宇宙、その大海の一しづく

人間情の海また湛ふ。

大地球やがては夢と消ゆべしと

東洋思想のたゞいろはのみ。

飛行機の翼にこの身のせ行かむ

四千萬年秋ふけて
まちかき星の世に入りぬべき。

とある夜半星は語らむ崑崙と

富士とヒマラヤ一齊に

頂高く靈火のぼると。

巨大なる何等の拳大空に

投げしつぶてぞバラボラを

ゑがき彗星無窮に走る。

美は美なり摩訶不思議なり何人か

式と律とに括るべき。

西施のひそみ太眞のゑみ。

我のみを衡となして物みなを

さばくべきかは人ならぬ

魚は水には溺れざりけり

客観の眞とはなぞや、いづくにか

主観によらぬそれを見む

鐵黒しとは人の目にのみ。

獨創の誇りは何か耳と目と

脳と手足の働きと

いづれかよその果にあらざらむ。

獨創のほまれは何か無意識の

摹擬か、世を蓋ふ大網の

目のたゞ一つわが生にして。

識のよそ時間空間識のうち

まぼろし共におほいなる

夢なり神祕三千世界。

南 歐 雜 詠

ボゾリの夏の岸うちて
銀山崩るゝ怒濤の叫び
叫を後に逍遙の
わが影「シビルの洞」近く。

断崖高くそばだちて
大洋の氷盡くるきわみ
白楊楊柳憂を吐いて
恨を凝す波にのぞみ
下には直ちに白日消えて
冥府の流ものすごく
フレガトシの焰の波
まじるアヒロンの焰の水
彼には暗流陰府の底より

さながら遅々たる幽鬼の群
歩むに似たるコチタスの水
一つに共によるところ
暗黒の巖さかだちて
永遠のうめきひびく處
此南歐の岸のうへ
詩聖の夢のたどりしよ。

水は曉の露湛ふ
今一面の清湖の岸
岸は葡萄の園しけき
緑に深き夏の色。

「未來」の暗き洞窟を
通じて炬光を望むごとく
人間の命を占ひし
シビルの靈は遠く去りて

詩聖の夢は三千のむかし、
 それよりいくたび桑滄の變、
 七丘榮華の極みのなごり
 かなたクローマエの岸のうへ
 玉樓金殿ならびたちし
 歡樂の郷不夜の郷、
 五百の山羊を驅り來り
 乳にましろき膚浴みし
 妖婦笑の聲はいづこぞ。

(右ボツリ灣上、アメルノ湖邊、ホーマアの「オデッセイ」第十卷によめるところ、こゝより直ちに冥府に通ずと信ぜし也)

誰の思のかけとめて
 夕の空に暮れのこる
 雲のほひのくれなるは
 月にも惜しき面かけや。

焰を收め火をつゝむ
 嶺は夕ぞ靜なる
 霞の袖にかきくれて
 のこる烟の一筋や。

夢より淡くたなびきて
 迷ふさながら人の世の
 悩み了りて天がける
 魂の姿と見るばかり。

風海草の香を吹いて
 星は洩れいづ雲の端
 「オリウ」の森のしけみより
 ひよくは牧の鈴のねか。

沿ふは汀の波のおと
 音は島々彩どれる

潮の上の高御座
靈のみまたく聞しめす。

智慧なく目なく光なく
幻を逐ひ影を戀ふ
塵の身いかに天地の
此夕ぐれを稱ふべき。

さはれ泡沫ましろなる
しばしの夢も海の影
さらば色なき調べなき
わが歌なほも一節か――

雨を、あらしを、夜あらしを、
砕けし舟にたすけ呼ぶ
聲を、うめきを、整へて
調ぶる靈の、高き御歌の。

(右カブリの島にてエスキアスの火山を望みつゝ)

羅馬のカピトルの階下にリエンヂを憶ふ

末世ひとたび身を起し
あらしに叫び雲に呼び
電光のつばさ借り來り
自由の旗を飛ばしめし
羅馬千載光榮の
最後のかたみ嗚呼リエンヂ、
花悉く碎け散る
春の恨みの紅か、
館は破られ身は裂かれ
鮮血こゝにカピトルの
石獅のもとに灑ぎしよ。
あゝ七丘の夢はるか

雄圖曆數残るやいづこ、
 新緑染むる舊山河
 暮雲思の色深き
 ゆふぐれ淋しあゝ羅馬。

コリゼアム

羅馬帝政時代の初期フラビヤ王朝に建てられし帝領中最大の闘武場
 八萬餘の看客席を有せしといふ、中世時代には此人造の石山より切
 り出せし材料を以て巨館宮殿屢々築かれぬ、今尙ほ儼然として羅馬
 市の一隅に聳ゆ。初めてコリゼアムを訪はんものは薄暮或は月夜を
 よしとす。

弦月沈める破窓のあなた
 光芒するどき巨星の姿
 天の驚嘆の目に似たり、

人造の山、コリゼアム、
 さながら地底に湧きいでゝ
 高く夜半の空に入る
 穹窿窓戸圓柱の
 頽壁こゝに二千年。
 むかし人種の罪業の
 呼びしと傳ふ洪水の
 禍またも廻り來て
 大陸海となるべくは、
 鯨鯢沖より迷ひ出で
 この石壁のただ中に
 錆を收めて休まむか。
 もしくは人間の世の終、
 劫灰深く地に布きて
 白骨かすかに枯れのこり、
 月光すでに暗うして
 大日輪の光明も

暗紅凄く燃ゆるとき、
 他界の靈のさまよひの
 途わが地球横ざらばこゝ
 休むはこゝかコリゼアム。
 忽ち襲ふ夜半の驟雨、
 破れし壁に身を寄せて
 待つ間ほどなくはるゝ時、
 雲より洩るる星震ひ
 無月の暗の凄しさ、
 驕奢腐爛の世の犠牲
 グラデイトルの幾千の
 血汐の波のみなぎりし
 巨壁さながち睨むに似たり。
 嗚呼これ凱旋三百餘、
 緑波うづまく地中海
 その天領の池となり。

ラインダニ、ウブ、ユーフレツ
 其帝國の堀となり、
 曙光東に現はれて
 まづタイバアの源照し、
 夕陽西に傾きて
 なほ七丘の領に入る
 羅馬——世界の権力の
 しるしと立てるコリゼアム。
 更に破滅の比なき
 その荒廢の大墳墓、
 おほいなるもの時くれば
 みな幽冥の暗に入る
 その標象とそびゆるや。
 雲は慘澹の夜の色
 陰風しきりに膚吹きて
 戦慄そよるに堪へがたき——

あゝ暗黒の幻影と
見るコリゼアム、聯想の
群にたぢろく人の子に
あまりに凄し、千歳の
威靈たゝへて聳立てり。

萬國青年大會に集る信徒の讃頌

歌はさらめや、
朝夕は喜の叫を擧げぬ、
唱へさらめや、
昇る日は喜の光注ぎぬ、
讃せさらめや、
たましひは喜の歌に溢れぬ、
崇めさらめや、
萬象は喜の色皆染めぬ、

歌はさらめや、歌はさらめや、
聲大水のひびきなしてああ歌はさらめや。

ベツレヘム星のかゞやき、

聖靈の肉のあらはれ、

新なる救の光八紘に照りしこのかた、

一千九百七の春秋、

大東の潮をわけて

つどひ來し萬邦の使徒、

いざ聖なる神を崇めむ。

言葉は萬、

心は一、

百千の流の合調

注ぎ入る靈の大海

「主の祈」いざ共に祈らむ。

いにしへは
 櫛櫛の岡のこみどり、
 ヨルダンの鏡なす水、
 染めなし、主の御榮、
 あらはせし主の御惠、
 見よこゝに今
 玲瓏の富士の白雪、
 はた藍涵す東海の波、
 アルファなりオメガなる
 全能の神の御姿
 光榮の影をほのみす。

歌はざらめや、
 唱へざらめや、
 讃せざらめや、
 崇めざらめや、
 萬の言葉萬の聲

大空の廣きにわたり、
 大水の響をなして、
 あゝ全能の神を主を
 聖なる靈を歌はざらめや。

セラリオ(トルコの後宮)

歐亞みなぎる陰雲の
 影はセラリオ蔽はじか。
 波斯印度の錦繡と
 羅綾とまじる帳の下、
 寵妃の膝なるリラの絃上、
 芭蕉の大葉にそよぐ露の
 しづく微風に吹かれ散れば、
 ものうや金髪肩に亂れて
 拂へどかゝる月の輕雲。

その對照か漆なす
 黒髪長き東方の
 おとめ斜めに牀により、
 皓腕あごにもたせつゝ聴く。

唇厚く眞紅を染むる
 黒き奴隸はかたへに立ち、
 珠玉點する白金の
 三尺長き管の端、

(アラビヤ産の名木は

吸口刻み)香料を

混じて夢をかもすべき

エジプト煙草ひとつまみ

つめしを捧げかしこみぬ。

*
*
*
*

ガブリエレ・ダヌンチオ

アドリアの海、アルペンの嶺越して
 飛行の翼、敵國の
 都の空にあらしを捲きぬ。

〔死の勝利〕海洋の讚、爛熟の
 筆のすさびも一時か、
 中佐ガブリエレ、劔取りて立つ。

虚空より爆彈ならず投げください
 檄は百萬、猛烈の
 火にも鐵にも優らざらめや。

ペルリンの猛虎に強ひて曳かれ行く
 キインの瘦せし山犬に

投ぜし檄の言葉聞かばや、

イレデンタ、イタリヤやがて七丘の

都の領と回る時

「カントウノボー」篇を続けむ。

永遠の都、七つの丘の上、

ラテンの光新なる

「ローマ」の意義を君歌はむか。

*彼の著作。「ローマ」は「勇」を意味す

(一九八・十月 東方時論)

時は到りぬ

花薫る巴里の城下の盟をと

夢みし魔王今いかに

リンデンの町秋かせ寒し。

猛獣の狂ひは何か、時いたり、

ルーデンドルフ尾を捲きて

逃ぐる、いざ追へ聯合の軍。

神人の共に怒れるゲルマンの

兵追ひ破れラテンの子、

疾風枯葉を捲くが如くに。

澎湃の潮あらたに回り來ぬ、

雄武ラテンの腕見よと

立ちてチュートン皆打ち攘へ。

秋かぜに大波小波戦勝の

誇ひとしく今叫べ、

ソナム、オアーズ、エーヌ、マルヌよ。

ライプチヒ。ゾータアローに百年の
むかし潰えし驕兵を
今チュートンの軍になぞらふ。

時到り天定りて人に勝つ
ことほり見よとゲルマンの
先に傲りし子らに宣ぜむ。

ベルジウム、北フランスの戦場を
昨日の夢とあとに見て、
「獨逸のライン」踏みこすはいつ。

時ぞ今、戦馬いさみて秋風に
嘶高し、目の前に
ラインの流近かるべきを。

長江の天險ライン人工の

巧つくして防ぐとも
聯合の雄師あに越ささらむ。

耳たてよ、パンデモニアム、ベルリンの
空に悲鳴の聲ひびく、
一簣缺かむや九仞の功。

ウンペール、マンジャンの軍雙の翼
あらしに鳴りて逃げ脚の
チュートンの兵追ひつゝ進む。

おだやかのおもて元帥百萬の
軍を胸裏に蓄へて
心兵驅くるいづれの郷ぞ。

エトアール凱旋門の傍に
やがて刻まむ碑のおもて

「元帥フエーシ國救へり」と。

河と流る血の紅の洗禮に
邦よみがへり赫耀と
ラテン文化の光照るべき、(一九一八・十月 東方時論)

遠つ世に

(竹風君の愛嬢の結婚を祝して)

- 一 遠つ世に天の御柱行き廻り
神の契りし道にして
之子歸ぎぬ祝はさらめや。
- 二 青き鸞紫の鳳人の世の
春に舞へかし額白く
頬くれなるの人ことほぎて。

- 三 三千の珠玉の履と黄金の
十二の釵何ならむ
陽臺の春生ける花咲く。
- 四 巾幗の織手國賣るレーニンを
斃すと聞ける時にして
歌ふ周南第一の章。
- 五 新なる妹脊を祝ふ大正の
七年九月敵國の
驕兵西に日に日に敗る。
- 六 叢雲の憂あとなくさしのぼる
玲瓏の月一輪の
隈なき光妹脊の閨に。
- 七 鴛鴦の契を初め琴瑟の

調整ふ此月の
桂の光てりまさるべき。

八 ひんがしの旭日の邦を守るべき
はた飾るべき子ら生めと
今日新なる妹脊を祝ふ。

九 武にすぐれ文に秀づる家の名を
兼ねて榮へよ大倭
日に新なる邦のいもとせ。

十 陸奥の信夫の里と嚴の
島の里との喜に
さんさしぐれの郷歌もよし。

(一九一八・九月)

*
*
*
*
*

一葉落

一葉落ちて秋知るべくば生きんため
血汐に濁き家を焼く
神戸の騒ぎ君何と見む。

霜ふみて堅氷いたる——生きんため
起りし騒ぎ耳にして
仰けばあらし雲吹きまくる。

黄金を空に積むとも民衆の
嫉み怒りを招くとき
三層の棲一朝の灰。

利に聴く富にかしこき名ありとも
教無き身の悲しさや

巨萬の寶たゞ民の誼ひ。

民衆の心微妙のはたらきを
知り得て後ぞ利を計り
富集めむもよろしかるべき。

富山の市米の高きにいきどほり
女性幾百叫喚の
誼ひに店を襲へりといふ。

黒潮の流さかまき幾萬の
魚介の群をはらふ如
動亂の波世をおほひくる。

『米高し』何等悲慘の運命を
暗に示せる言の葉ぞ
無形の波瀾世にうづまけり。

歐洲の大亂四たび年廻り

陰雲陰霧いや暗う

碧の空をいつか見るべき。

『大局の半も未だ過ぎ去らじ』
冥想の目に運命を
観ぜる人の夢かまことか。

支那にして七國の亂我にして
元龜天正さも似たる
世界の狂ひいつしづまらむ。

天上のあなた等しく雲亂れ
あらし狂ひて霹靂と
轟雷競ふ、——世のなぞらへに。

アリトマン、オルマヅウドの戦は

天のあなたに狂へるや
驚異の世紀何を孕める。

大亂とよべる熔爐のたゞ中に
すべての物の投げられて
やがて渣無き黄金を見む。

大波瀾四海をおほひ人類の
またき革命成し遂けて
やがてやむべき戦か否か。

いにしへのノアの洪水、一切を
呑みて新たな世をうめる——
今はた似ずや大亂の波。

(一九一八・九月六合雜誌)

平和の曙光

霜枯の軍の場に自動車の
爆音さびし、白旗を
立て、進めるゼルマンの使者。

白旗をたてくる敵の使者引きて
微笑湛ふる元帥は
手に秋霜の威の文握る。

千萬の霹靂落ちし大平野
今寂としてゼルマンの
使者の一群うなだるる見る。

ロマノフとハブスブルグの滅亡に
ホーヘンツォレン跡追ひて

鼎の脚の三つ皆倒る。

驕慢と無道のあらび報ひ來て
千仞の坂、圓石を
投ぐるが如く亡び沈むや。

千萬のむくろを積みて功成らず、
無道の報國破れ
家失へる悲鳴の狂ひ。

雷霆の怒の如く全歐に
轟き荒れしチヨウトンの
末路あらしに散る葉に似たり。

鐵と血のあらびの權化、全歐を
馬蹄の下ににじるべく
立ちし蠻軍かく亡ぶ、見よ。

「雷はいなるバピロン斯くぞ亡びむ」と
天使は海に大石を
投げぬ、ゼルマン見よ天の罰。

暴の報ひ暴に亡ぶと警めを
千載遠く残し得て
カイザアの名を朽ちざらしめよ。

領内に敵の一兵入れずして
土崩瓦解の奇蹟見る、
天の怒は火よりもはけし。

堅城のストラスブルグはたメツツ
ケルン、マインツ、コブレンツ
併せて共に一朝に棄つ。

龍王の威を鎮むべき百千の

海の堅艦ことごとく
舳鱗ならべて敵に奪はる。

「劔戟に亡びむ劔をとる者と
聖の教の現證の
ひとつ今はたゼルマンに見る。

皇天に代る權威と高ぶりて
世を見下せし果を見よ
亡家亡國楚囚の恨み。

赤旗をたてゝ逃るゝ親王の
自動車追うて水兵の
一團銃を一齊に撃つ。

大空に滔るまでに旗赤く
潮漲る、ゼルマンの

子もマルセイユ歌ふ聞かずや。

賢と愚のへだより計る三十の
年のあしたは如何ならむ
世界の潮日に日に高し。

ゼルマンの粕をねぶりし閩族の
夢は破れぬ、東海の
空は今より春にほふべく。

來るべき聖誕祭よ世の東
世の西こぞりホザンナの
讃頌天に地にどよむべき。

永遠の春の曙見え初むる
一千九百十八の
歳に今逢ふ祝はさらめや。(一九一八・十一月)

奸雄の末路

全歐の地圖染め直し、選民の領を四海に開かむと
呼びし奸雄今何の名ぞ。

冒瀆の言を悔いずや『皇天の
選びわが民——わが上に
降りぬ神のおほいなる靈』

『神の劍、上帝の武器、天命の
攝政——われにそむくもの
信ぜざるもの皆死すべし』と。

サラエボウ邊土の空のさわぎより
風雲の機に乗りいでし

鬼神に似たる霸王のいさみ。

一瞬に馬蹄すゝめてセイヌ河
パリ滿城の春占めむ
大夢の破すでに久しく——

このかたの絶望の勇、兇猛の
あらび歐土を震はしし
業みな頭上薪積むのみ。

王城の夜半に、露營の曉に
神祕の文字いくたびか
ベルシヤールの凶を示せる。

リンデンの街に立ちて大空に
ドームの高く入るを見し
最後の時か落葉の秋。

紅海ホルマス海峡の海峽に
弦月の旗まつ沈むる
秋凋落を告ぐる一葉の大空

ガリボリの無慚の敗大英の
獅子王の名を恥ぢしめし
昨日を夢の一場として

ゴトルデン、ホルンを過ぎて黒海を
目がけ寄せくる澎湃の
怒潮に進む聯合の艦。

さながらにヨブの凶報戦場の
西より絶えず傳へ来る
大敗滅の無慚の叫び。

海陸に無比の暴威に惱ませし

民の紅涙一滴も
全能の座に昇らざらめや。

侵入の領土の民を射斃して
小兒の手首切り落し
その目括りし虎狼の非行。

救命の器とりあげ甲板に
老幼婦女を移らして
潜航艇は悪鬼の笑。

波切りて潮けたてて一令の
もとに忽然沈みさり
號哭の民みな溺れしむ。

人間の想像の目も寫し得ぬ
凶悪のわざ悉く